

文学部

学部基礎情報

<p>【理念・目的】</p> <p>法政大学文学部は、1922年に法文学部の文学科と哲学科として開設されて以来、「自由と進歩」という大学建学の精神を受け継ぎつつ、文化全体と深く結びついた学問を探究し、幅広い人間的教養を備える人材を輩出してきた。そのよき伝統を継承しながら、新しい時代に向かって人間と社会をとらえ直す研究を進めるとともに、大学全体で培ってきた「進取の気象」を持つ自立した市民を育み、多様化する世界で問題の解決に向かう真の知性を示していくことを目的とする。</p>
<p>【人材の育成に関する目的及びその他の教育研究上の目的（教育目標）】※学則別表(11)</p> <p>文学部は、各学科のカリキュラムのもと、以下に示すような人材を育成する。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 古今東西の文献・資料・情報を研究・調査することにより、広い視野・深い教養にもとづく独創的な思考力を発揮できる人間。 2. 歴史・世界・社会の中で客観的に自らの位置を見定め、柔軟な感受性をもって他者を理解し、多様な価値観を公正に評価できる人間。 3. 当面する課題を検証し、解決策を考え、それを説得力をもって発信できる人間。 <p><哲学科></p> <p>哲学科は、「自由と進歩」という大学建学の精神のもとで、深い哲学的教養、人間理解、広い視野に裏付けられた次のような人材を育成することを目標とする。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. ものごとを論理的に深く考えて、説得力のある議論と問題の解決策を提示し、発信できる人間。 2. 国際的な視野と多様な関心をもって、世界と人間・社会のありかたとその課題を洞察し、広く他者に心を向け積極的に主張を展開できる人間。 3. 時代や権威に流されず「進取の気象」にあふれて、ものごとに向かって前向きな姿勢を保ちつつ考察し、発信できる人間。 <p><日本文学科></p> <p>日本文学科は、所定の教育課程のもと日本の文学・言語・芸能の歴史と現状を専門的に学ぶことにより、以下に示すような資質・能力を備えて、国際化・情報化が進む21世紀社会において自らの見解を自らの言葉で的確に発信できる人材を育成する。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 日本文学の作品世界のみならず、現代の様々な事象を繊細に感受できる豊かな感性。 2. 豊かな感性によって感受した様々な事象について、論理的に分析・考察する能力。 3. 分析・考察の結果を独自の世界や思想を構築することに結びつけられる創造性。 4. 上記の資質・能力によって得た一連の成果を社会に向かって魅力的に発信していく表現力。 <p><英文学科></p> <p>英文学科では、文学部全体の教育目標のもと、以下に示すような人材を育成する。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 英語という「言語」を基礎に、文学を学ぶことによって自他の人生や世界をより深く考えることのできる思考力と倫理意識を持つ人間。 2. 英語という「言語」を基礎に、言語学を学ぶことによって科学的な分析力と思考力を養った人間。 3. 「人間とは何か」という問いを、英語を中心とした言語を通して思索することのできる人間。 4. 言葉を通して、人間的なものへの高い感受性と共感力を持つと同時に、その共感を、単なる情緒的感覚としてではなく、言葉によって他者に語りうる論理性を備えた柔軟かつ理性的な人間。 5. 英語力、日本語力、読解力、文章力、論理的思考力、分析能力を持つ人間。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S: さらに改善することができた、A: 従来通り効果的に取り組むことができた、B: 改善することができなかった。」を意味する。

<史学科>

史学科は、所定のカリキュラムのもと、以下に示すような人材を育成する。

1. 具体的な史料に基づいた歴史学の方法論を習得することにより、歴史学への学問的関心を深め「歴史を見る眼」を持つことのできる人間。
2. 史料を博搜しその価値を判断する能力をもち、史料を適切に活用した実践的な研究ができる人間。
3. 現代社会、さらには未来への展望をも含めた人類史を、「歴史を見る眼」から判断することのできる人間。

<地理学科>

地理学科は、学科が提供するカリキュラムの下、以下に示すような人材を育成する。

1. 地理学の方法論を学ぶことによって地理学的視点から「地域の特性」を理解する能力をもった人材。
2. 地理学的見方・考え方から得られた「地域の特性」を自ら社会に発信する意欲をもった人材。
3. 目の前にある「社会的な問題」に対し、自ら率先して取り組み、解決する能力を持った人材。

<心理学科>

心理学科では、以下に示すような人材を育成する。

1. 幅広い心理学の知識・技能を獲得することで、人や社会に対して多面的かつ客観的に洞察することができる人間。
2. 心に関わるさまざまな問題を専門的な立場から検討でき、自らの力で新たな知識を生み出せる人間。
3. 的確なプレゼンテーション能力、コミュニケーション能力、グループ活動能力を有し、他者と協働しながら自分自身の持つ知識・技能を活用し、社会に向けて効果的に発信できる人間。

【ディプロマ・ポリシー】

文学部は、各学科のカリキュラムのもと、所定の単位を修得し以下に示す水準に達した学生に対して、「学士（文学）」を授与する。

1. 各専門分野の学問内容や研究方法を理解している。また、幅広い教養を備えている。
2. 自ら問題を発見し解決していく思考力や調査力を有している。
3. 自らの考えを論理的に表現できる文章力やプレゼンテーション能力を有している。また、他者と協力し議論しながら多角的に問題をとらえることができる。

<哲学科>

哲学科は、所定の単位の修得により以下に示す水準に達した学生に対して「学士（文学）」の授与を認める。

1. 哲学的専門性を備えた知識をもつとともに、深い教養と国際的な広い視野をもっている。
2. 古今の哲学者のテキストを正しく理解でき、同時に哲学的知見を現代の諸問題に応用する力を有している。
3. 論理的な理解力や表現力をもち、説得力のある仕方でも口頭での発表や文章による表現ができる。
4. ディスカッション等において哲学的教養に裏打ちされた豊かなコミュニケーション能力を示せる。
5. 哲学的な問題発見能力と独創的な発想力・問題解決能力をもっている。

<日本文学科>

日本文学科は、所定の教育課程のもと、所定の単位を修得し、以下に示す水準に達した学生に対して、「学士（文学）」の授与を認める。

1. 日本の文学・言語・芸能の歴史と現状についての基本的な知識を身につけている。
2. 所属する文学・言語・文芸の三コースいずれかの領域における正確な読解力を有している。
3. 自ら問題を発見し、その問題について考察を深められる思考力を有している（文学・言語コース）。
自ら主題を発見し、その主題について構想を深められる想像力を有している（文芸コース）。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた、B：改善することができなかった。」を意味する。

4. 自らの研究や発想の成果を的確に伝えられる日本語の表現力を有している。

<英文学科>

英文学科では、所定のカリキュラムのもと、所定の単位を修得し、以下に示す水準に達した学生に対して「学士（文学）」の授与を認める。

1. 論理的な日本語力・英語力とそれに基づく高度なコミュニケーション能力を備えている。
2. 批判的・論理的思考力とそれに基づく課題発見力・課題解決力を有している。
3. 自らの文化や言語を、グローバルな文脈の中で相対化・客観化して捉える能力を有している。
4. 英米文学・文化研究または科学的な英語学・言語学研究の基礎的な知識をもとに、一つの課題の解決のために、様々な知識を有機的に結びつける能力を有している。

<史学科>

史学科は、所定のカリキュラムのもと、所定の単位を修得し以下に示す水準に達した学生に対し、「学士（文学）」の授与を認める。

1. 国際的な視野と、政治・経済・社会・文化などにわたる幅広い歴史知識を得ることによって、現代社会の問題を見る眼を養い、未来を展望することができる。
2. 史料の批判的考察から体系的理解に至る歴史学の分析方法を習得して思考力・判断力を培い、自立的に問題を発見・追究・検証することができる。
3. 発表・討論において、自分の意見を論理化・体系化して相手に伝え、かつ相手の意見を理解することができる。
4. 次世代の教育に歴史学の成果を生かし、また、文化遺産の継承に貢献することができる。

<地理学科>

地理学科は、地理学科のカリキュラムのもと所定の単位を修得し、以下に示す水準に達した学生に対して、「学士（文学）」の授与を認める。

1. 人間の生活の舞台である地球表層の自然環境や人文・社会環境について基礎的な知識を身につけ、地理的諸事象の基本的メカニズムを理解しているとともに、幅広い教養も身につけている。
2. 地理学的な思考力やものの見方を身につけ、それらに基づく研究方法を用いて考察することができる。
3. 地理学の知をもって社会の諸問題に関心を持ち、他者の声に耳を傾け、自分の考えを口頭表現や文章表現によつて的確に発信することができる能力、地域社会のニーズに応えられる能力、および諸問題を解決する能力を身につけている。

<心理学科>

心理学科のカリキュラムのもと、所定の単位を修得し以下に示す水準に達した学生に対して、「学士（文学）」の学位の授与を認める。

1. 人の認知について科学的理解をすることができる。
2. 人の発達について科学的理解をすることができる。
3. 観察・実験・調査を通して、心の機能を測定し、分析することができる。
4. 国内外の先行研究や社会的要請をふまえて、自ら課題を設定することができる。
5. 研究・学習成果を的確に他者に伝えることができる。
6. 研究・学習目標を達成するために、他者と協働することができる。

【カリキュラム・ポリシー】

文学部では、各学科のカリキュラムのもと、教育目標と学位授与方針にそつて、以下に示す教育課程を編成している。

1. プレゼンテーションやディスカッション等の能力を涵養するため、各学科の専門科目として「ゼミナール」や「演習」を設置している。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた、B：改善することができなかった。」を意味する。

- 文章読解・資料調査・レポート作成・ディベート等の基礎的なスキルを涵養する初年次教育として、「基礎ゼミ」等を設置している。
- 幅広い知識や教養を涵養するため、市ヶ谷リベラルアーツセンター科目の単位を卒業所要単位に含めている。
- グローバルな問題意識を涵養するため、全学科を対象とする「共通科目」や他学科開講科目を設置している。
- 課題を発見し検証していく思考力や表現力を涵養するため、「卒業論文」を4年間の集大成として位置づけている。

<哲学科>

哲学科は、学科の人材育成の目的を達成するために以下に示す教育課程を編成する。

- 文章読解、ディスカッション、プレゼンテーション、レポート作成の基礎力を涵養するために、初年次に基礎ゼミを設置している。
- 国際的な幅広い知識を獲得し、広い視野でものごとを思考できる能力の養成をはかるために、リベラルアーツ科目を卒業所要単位に含めている。
- 専門科目については、哲学科卒業に相応しい学力を段階的に身につけられるようにするために、概論科目・哲学史科目および基礎演習からはじめて、特講科目、演習（ゼミ）を経て卒業論文に至るといった発展的な教育課程を編成している。
- 視野の広い問題意識を養うために、文学部の「共通科目」、および他学科公開科目の履修を可能にしている。
- 学生がみずから問題を発見し、解決してゆく力を養うために、卒業論文を四年間の学びの集大成として位置づけている。

<日本文学科>

日本文学科は、教育目標と学位授与方針にそって、以下に示す教育課程を編成している。

- 1年次においては、大学生の学びに必要とされる能力の習得のため、少人数制による初年次教育科目を設置するとともに、専門教育への導入として、日本の文学・言語・芸能、また中国文学について基本的な知識を修得できる科目を配置している。
- 専門性を広く把握すると同時に深く追求するため、文学・言語・文芸の3コースを設置し、学生は2年次からそのいずれかに籍を置き、少人数制のゼミナールに所属する。より正確な読解力、深い思考力・想像力、的確な表現力、問題発見・解決能力を涵養するため、専門分野に関する科目および隣接領域に関する科目を、段階的に、また体系的に履修できるよう配置している。
- 教養教育科目（市ヶ谷リベラルアーツセンター科目）の単位を卒業所要単位に含むこととする。センターのカリキュラムに従って履修することにより、さらに幅広い学問分野の知識を得て、柔軟かつ多角的な認識力・思考力・問題解決力等を涵養する。
- 4年次においては、ゼミナール担当教員の指導のもと、卒業論文の執筆に取り組む。なお、卒業論文は、日本文学科の教育課程における集大成とし、大学での研鑽の成果を発揮するものとして位置づける。

<英文学科>

英文学科では、教育目標と学位授与方針にそって、以下に示す教育課程を編成している。

- 1年次においては、「演習科目」として、基礎ゼミにおいて導入教育を行ない、同時に、概説科目を配置してさまざまな分野への導入となる「講義科目」を設置している。
- 2年次においては、学生各自の基礎的な英語力を向上させるための Speaking や Writing などの実践的な科目とともに、学問への興味をかき立てるように、少人数教育としての2年次演習および専門科目を配置している。
- 3年次においては、専門的な知識が深められるように、併設されている専門科目と合わせて少人数制のゼミを配置している。
- 4年次においては、学生各自が選んだ研究テーマを卒業論文としてまとめられるように、担当教員のきめ細かな面談指導と添削指導を行なっている。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S: さらに改善することができた、A: 従来通り効果的に取り組むことができた、B: 改善することができなかった。」を意味する。

5. 上記の1-4と並行して、4年間の学生生活を通して幅広い英語力の獲得や文化交流ができるように、海外の提携大学への短期・中期の留学制度を設定している。

<史学科>

史学科では、所定のカリキュラムのもと、教育目標と学位授与方針にそって、以下に示す教育課程を編成している。

- 1年次には教養教育に加え、国際的な視野と幅広い知識を身につけるため、日本史・東洋史・西洋史の概説を設置している。
- 新入生が大学における多様な授業に十分に適応し、その能力を発揮することが可能になるよう、初年次教育科目として「基礎ゼミ」を設置している。
- 2年次以降、日本史・東洋史・西洋史の三専攻に分かれ、演習（ゼミ）を中心とした歴史学の専門的教育に入る。
- 自立的に研究できる能力を向上させるため、演習とともに史料の活用や外書の読解能力を実践的に訓練する授業を設置している。
- 自分の専攻にとどまらず幅広い学識を得るために履修できる多様な講義科目を設置している。
- 4年生は所属ゼミ担当教員の指導のもと、一つの研究課題に取り組み、卒業論文を作成していく。課題を発見し検証していく思考力や表現力を涵養するため、「卒業論文」を学科における学業の集大成として位置づけている。

<地理学科>

地理学科では、教育目標と学位授与方針にそって、以下に示す教育課程を編成している。

- 幅広い知識や教養を涵養するため、市ヶ谷キャンパスのリベラルアーツ科目の単位を卒業所要単位に含めている。また、1年次には「基礎ゼミ」で、大学での学習方法の基礎・基本を身につけさせる。
- 地理学科の専門科目は、1年次では入門的な科目、2年次以降は地理学の様々な分野の基礎的知識を身につけるため各論科目が配置されている。また、主に3年次以降において、地理学の方法論や研究法を身につける、演習や実習科目が配置されている。
- フィールドワークを通じて地域の実態を調査し、その結果をもとにレポートを作成することによって、調査技能、研究方法および文章表現能力を身につけさせる「現地研究」が必修科目の一つとして配置されている。
- プレゼンテーションや討論を通して、地理学の研究手法や体系を学び、問題解決能力や卒業論文作成の基礎的能力を身につけるため、演習（ゼミ）が配置されている。
- 課題を発見し検証していく思考力や表現力を涵養するため、「卒業論文」を4年間の集大成として位置づけている。優秀な学生が早期に研究活動に専念できるよう、3年次で早期卒業し大学院修士課程へ進学する5年一環プログラムも用意されている。

<心理学科>

心理学科は、教育目標と学位授与方針にそって、以下に示す教育課程を編成している。

- 人の心を研究するために必要な知識・技能を偏りなく修得できるように「認知」と「発達」の二領域を中心とした専門科目を配置している。
- 心理学の全領域に関わる基本的な知識・技能を学生が修得することを促すために、選択必修の学科基礎科目という科目区分を設定している。
- 1年次に基礎ゼミ、2年次には演習Ⅰ・Ⅱ、3年次と4年次には研究法Ⅰ・Ⅱを配置し、一貫して少人数での演習形式の科目を履修できるようにし、プレゼンテーション能力、コミュニケーション能力を系統的かつ継続的に修得できるようにしている。
- それまでに修得した知識・技能を活用して、人間の心について自らが検討する価値のある問題を設定した上で、科学的・客観的に分析し、その研究成果を明瞭に記述する能力を涵養するため、「卒業論文」を4年間の集大成として位置づけている。

【アドミッション・ポリシー】

文学部は、各種の入学試験（※）をとおして、以下に示すような能力・意欲等を有する受験生の入学を認める。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた、B：改善することができなかった。」を意味する。

※ A方式入試、T日程入試、大学入学共通テスト利用入試、自己推薦入試、指定校推薦入試、付属校推薦入試、スポーツ推薦入試、グローバル体験公募推薦入試、英語外部試験利用入試（出願資格型）、外国人留学生入試前期日程、帰国生入試、国際バカロレア利用自己推薦入試。

1. 高等学校で履修する国語・外国語・地理・歴史・公民・数学・理科等について、卒業が認められる水準で教科内容を理解している。
2. 入学後の修学・研究に必要な基礎的な知識・教養を有している。
3. 論理的な思考ができ、自分の考えを明快に表現することができる。
4. 志望する学科の専門分野に深い関心を持ち、強い学習意欲がある。

<哲学科>

哲学科は、文学部全体の方針に準じ、各種の入学試験（※）を通して以下に示すような能力、意欲を有する受験生の入学を認める。

※ A方式入試、T日程入試、大学入学共通テスト利用入試、指定校推薦入試、付属校推薦入試、スポーツ推薦入試、グローバル体験公募推薦入試、外国人留学生入試前期日程、帰国生入試、国際バカロレア利用自己推薦入試。

1. 大学での学習のための一般的基礎学力を有している。
2. 入学後の修学・研究に必要な基礎的な学力・知識を有している。また、論理的に思考ができ、自分の意見を表現することができる。
3. 哲学に深い関心を持ち、強い学習意欲がある。

<日本文学科>

日本文学科では、文学部の方針に準じ、各種の入学試験（※）をとおして、以下に示すような能力・意欲等を有する受験生の入学を認める。能力・資質を的確に判断して学生を受け入れるため、多様な入試経路を用意し、日本文学科で学ぶにふさわしい者に広く門戸を開放する。

※ A方式入試、T日程入試、大学入学共通テスト利用入試、自己推薦入試、社会人入試、指定校推薦入試、付属校推薦入試、スポーツ推薦入試、グローバル体験公募推薦入試、外国人留学生入試前期日程、帰国生入試。

1. 高等学校で履修する国語・外国語・地理・歴史・公民・数学・理科等について、卒業が認められる水準で教科内容を理解している。
2. 入学後の修学・研究に必要な基礎的な知識・教養を有している。
3. 論理的な思考ができ、自分の考えを明快に表現することができる。
4. 日本の文学・言語・芸能について深い関心を持ち、それらの研究や文芸創作に必要な、知識・読解力・思考力・表現力全般にわたる、より多様でより奥深い人間的な学力・資質を有している。

<英文学科>

英文学科では、文学部の方針に準じ、各種の入学試験（※）を通して、以下の点を重視し、一つの固定した視点にとらわれずに様々な視点から物事を学ぼうという意欲と能力のある受験生の入学を認める。

※ A方式入試、T日程入試、英語外部試験利用入試（出願資格型）、大学入学共通テスト利用入試、指定校推薦入試、付属校推薦入試、スポーツ推薦入試、グローバル体験公募推薦入試、国際バカロレア利用自己推薦入試、外国人留学生入試前期日程、帰国生入試。

1. 高等学校で履修する国語・外国語・地理・歴史・公民・数学・理科等について、卒業が認められる水準で教科内容を理解している。
2. 入学後の修学・研究に必要な基礎的な知識・教養を有している。
3. 論理的な思考ができ、自分の考えを明快に表現することができる。
4. 英語への関心、英語文学と英語圏文化への興味をもっている。
5. 外国語教育や言語理論の研究に必要な科学的思考を養う意欲を持っている。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた、B：改善することができなかった。」を意味する。

近年採用した国際バカロレア利用自己推薦入試では、とりわけ、一定の能力を持ちつつ多様な個性をそなえた受験生の入学を認めている。

<史学科>

史学科は、各種の入学試験（※）をとおして、以下に示すような能力・意欲等を有する受験生の入学を認める。

※ A方式入試、T日程入試、大学入学共通テスト利用入試、指定校推薦入試、付属校推薦入試、スポーツ推薦入試、外国人留学生入試前期日程、帰国生入試。

1. 高等学校で履修する国語・外国語・地理・歴史・公民・数学・理科等について卒業が認められる水準で教科内容を理解している。
2. 入学後の修学・研究に必要な基礎的な知識・教養を有している。
3. 論理的な思考ができ、自分の考えを明快に表現することができる。
4. 史学科の専門分野に深い関心を持ち、強い学習意欲がある。

<地理学科>

地理学科は、各種の入学試験（※）を通して、以下に示すような能力・意欲等を有する受験生の入学を認める。

※ A方式入試、T日程入試、大学入学共通テスト利用入試、指定校推薦入試、付属校推薦入試、スポーツ推薦入試、自己推薦入試、外国人留学生入試前期日程、帰国生入試。

1. 高等学校で履修する国語、外国語、地理、歴史、公民、数学、理科等について、卒業が認められる水準で教科内容を理解している。
2. 入学後の修学・研究に必要なとされる基礎的な知識・教養を有している。
3. 論理的な思考ができ、自分の考えを明快に表現することができる。
4. 地理学科の専門分野に深い関心を持ち、強い学習意欲がある。

<心理学科>

心理学科では、各種の入学試験（※）をとおして、以下に示すような能力・意欲等を有する受験生の入学を認める。

※ A方式入試、T日程入試、大学入学共通テスト利用入試、指定校推薦入試、付属校推薦入試、スポーツ推薦入試、外国人留学生入試前期日程、帰国生入試。

1. 高等学校で履修する国語・外国語・地理・歴史・公民・数学等について、卒業が認められる水準で教科内容を理解している。
2. 入学後の修学・研究に必要な基礎的な知識・教養を有している。
3. 論理的な思考ができ、自分の考えを明快に表現することができる。
4. 心理学科の専門分野に深い関心を持ち、強い学習意欲がある。

【定員管理の状況】

定員充足率(2017～2021年度)(各年度5月1日現在)

年度	入学定員	入学者数	入学定員充足率	収容定員	在籍学生数	収容定員充足率
2017	655	707	1.08	2,620	2,990	1.14
2018	655	665	1.02	2,620	2,962	1.13
2019	655	650	0.99	2,620	2,980	1.14
2020	655	661	1.01	2,620	2,856	1.09
2021	670	673	1.00	2,635	2,832	1.07
5年平均			1.02			1.11

※1 定員充足率における大学基準協会提言指針

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。
 ※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ
 ※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S:さらに改善することができた、A:従来通り効果的に取り組むことができた、B:改善することができなかった。」を意味する。

【対象】

- ①学部・学科における過去5年間の入学定員に対する入学者数比率の平均
- ②学部・学科における収容定員に対する在籍学生数比率

【定員超過の場合】※医学・歯学分野は省略

提言	改善課題	是正勧告
実験・実習を伴う分野 (心理学、社会福祉に関する分野を含む)	1.20 以上	1.25 以上
上記以外の分野	1.25 以上	1.30 以上

【定員未充足の場合】

提言	改善課題	是正勧告
すべての分野共通	0.9 未満	0.8 未満

※2 定員充足率における私立大学等経常費補助金不交付措置の基準

年度	～2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021
入学定員超過率	1.20 以上	1.17 以上	1.14 以上	1.10 以上	1.10 以上	1.10 以上	1.10 以上
収容定員超過率	1.40 以上	1.40 以上	1.40 以上	1.40 以上	1.40 以上	1.40 以上	1.40 以上

【求める教員像および教員組織の編成方針】(2018年度自己点検・評価報告書より)

学部・学科の理念を十分に理解した上で、学生一人一人に目の届くきめの細かい教育を行ない、かつ、独創的で最先端の研究に従事できる教員が求められる。同時に教員は、学部・学科運営にも積極的に関わることも重要である。

教員組織においては、年齢、性別、国籍、専門分野等のバランスに留意し、理念を実現するのに十分な教育・研究・指導が可能となる編成を目指す。

【専任教員数および年齢構成一覧】

2021年度専任教員数一覧(2021年5月1日現在)

教授	准教授	講師	助教	合計	設置基準上 必要専任 教員数	うち教授数
54	11	5	2	72	42	23

専任教員1人あたりの学生数(2021年5月1日現在): 39.3人

年齢構成一覧(2021年5月1日現在)

年度\年齢	61歳～70歳	51歳～60歳	41歳～50歳	31歳～40歳	30歳以下
2021	23	26	16	7	0
	31.9%	36.1%	22.2%	9.7%	0.0%

I 2021年度 大学評価委員会の評価結果への対応

【2021年度大学評価結果総評】(参考)

文学部では、学部を共通して初年次からのキャリア教育と卒業論文の作成指導を通じた学生の主体的な学習姿勢の養成に取り組み、さらに学科ごとに、専門性の高い充実したカリキュラムを編成し、アクティブラーニングや双方向型教育の導入にも積極的である。こうした点がCOVID-19下で、オンライン教育を導入することで、さらに強化されていった点が高く評価できる。

履修指導や学習指導もオンラインを活用して例年通りかそれ以上の水準が保たれた。また学生モニター制度を通じて学生の生活上や就活上の不安が組み上げられ、教授会を通じて教員に共有され、キャリアセンターとも協働がはかられた点が評価される。上級生から新入生に対して学習指導する場を設けられたこともモデルとなる事例である。学生からの意見を組み入れ、卒業論文の事前申請書類、および本体の電子化も行われた。

国際性を滋養するプログラムが多数展開し、一部は実施できなかったもののオンライン交流によって拡充して実行さ

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。
 ※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ
 ※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S: さらに改善することができた、A: 従来通り効果的に取り組むことができた、B: 改善することができなかった。」を意味する。

れ、フランスの大学との交流授業などの試みもなされた。キャリア教育も初年次教育の充実に加え、その他の学年次でも学部共通の取り組みと学科独自の取り組みとで進められている。

FD 活動についても、教員同士の授業相互参観が拡充して行われ、オンラインでの教育内容や指導について活発な討議と検討が行われた点がこうした改革につながっている点が高く評価できる。今後一層の改善を期待できる。

留学生入試、社会人教育について制度改革が検討されてきたが、今年度は COVID-19 下で実施が難しくなり、今後の改善が期待される。なお、自己点検・評価シートにおいて「問題点」が挙げられていなかったが、2020 年度目標が概ね達成されていた場合についても、次年度さらなる成果を出すためにも必要であると考えられる。

【2021 年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】

2020 年度に引き続き、2021 年度も COVID-19 が蔓延した時期もあり、ハイフレックスおよびオンラインでの実施を余儀なくされた授業も多くあった。2020 年度の経験を踏まえ、2021 年度には引き続き COVID-19 蔓延下での効果的な授業方法、問題点、対策についての意見交換を行った。意見交換は各学科で行った後、さらに質保証委員会にて学科間の意見交換を行った。質保証委員会での議論の結果は 2021 年度第 11 回教授会にて報告された。

また、COVID-19 の影響の中でも学生に必要な学びを中断することが無いような対策が講じられている。感染防止対策を行いつつ、地理学科の「現地研究」は、COVID-19 蔓延下では、少人数で密を避け、関東圏において日帰りで実施した。さらに、宿泊を伴う実習は PCR 検査を実施し、宿泊施設の個室対応を行うなど、厳重な COVID-19 対策を行った上で実施した。英文学科では COVID-19 蔓延のため、中止となった SA プログラムの代替措置として、2022 年度にはヴィクトリア大学（カナダ・ブリティッシュコロンビア州）でのオンライン SA を実施することを決定した。

【2021 年度大学評価委員会の評価結果への対応状況の評価】

文学部では、2021 年度評価を踏まえつつ、2022 年度においても初年次からのキャリア教育と卒業論文の作成指導を通じた学生の主体的な学習姿勢の養成に取り組んだ。さらに学科ごとに、専門性の高い充実したカリキュラムを編成し、アクティブラーニングや双方向型教育の導入にも積極的である。こうした点が COVID-19 下で、オンライン教育を導入することで、さらに強化されていった点が高く評価できる。

特に、COVID-19 蔓延下での効果的な授業方法、問題点、対策について質保証委員会の場で学科間の意見交換を行うなどして議論の結果を学部内で共有したほか、COVID-19 の影響の中でも学生に必要な学びを中断することが無いように感染対策の徹底を基本にしつつ、学科ごとに肌理の細かい対策を講じている点は高く評価できる。

II 自己点検・評価

1 理念・目的

(1) 点検・評価項目における現状

1.1 大学の理念・目的を適切に設定しているか。また、それを踏まえ、学部・研究科の目的を適切に設定しているか。

1.1①学部（学科）の理念・目的は大学の理念・目的を踏まえて設定されていますか。2018 年度 1.1②に対応

はい

1.1②理念・目的の適切性の検証プロセスを具体的に説明してください。2018 年度 1.1③に対応

※検証を行う組織（教授会や各種委員会等）や検証の時期等、具体的な検証プロセスを記入。

学部・学科における理念・目的の適切性の検証は、執行部の主導のもと、教授会、教学改革委員会、各学科の学科会議において実施される。そのプロセスは原則として以下のとおりとなる。

【1】教授会：検証実施の決定。→【2】教学改革委員会：検証方法の決定。→【3】学科会議：検証の実施。→【4】教授会：検証結果の承認。なお、検証の時期については固定化されていない。

1.2 大学の理念・目的及び学部・研究科等の目的を学則又はこれに準ずる規則等に適切に明示し、教職員及び学生に周知し、社会に対して公表しているか。

1.2①学部（学科）の理念・目的は学則又はこれに準ずる規則等に明示していますか。2018 年度 1.2①に対応

はい

1.2②学部（学科）の理念・目的を教職員及び学生に周知し、社会に対して公表していますか。2018 年度 1・2②に対応

はい

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注 3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた、B：改善することができなかった。」を意味する。

(2) 長所・特色

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、取り組み内容から「長所」や「特色」として特記すべき事項を記入。なお、現在「長所」や「特色」として特記すべき事項がなかった場合は、今後さらに「長所」や「特色」とする取り組み等を向上させていくために課題と考えられる点やその対応計画を記入していただく等できる限り記入をしてください。

内容
毎年度、年度初めに教授会・教学改革委員会にて「理念・目的」の点検を呼びかけ、各学科で点検を始め、教学改革委員会、教授会と、複数のステップを経て確認を行っている。

(3) 課題・問題点

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、改善を要すると判断される「課題・問題点」として特記すべき事項を記入。なお、「課題・問題点」に対する改善計画がある場合には、その具体的な計画（既に実施している場合にはその進捗状況も含めて）をあわせて記入してください。「課題・問題点」を認識し改善につなげるためにできる限り記入をしてください。

内容
特になし。

【理念・目的の評価】

文学部では、大学の理念・目的を表明する法政大学憲章「自由を生き抜く実践知」に通底する、建学の精神（「自由と進歩」や「進取の気象」）を踏まえ、独創的な思考力、他者への理解、課題検証や解決策の立案能力に優れた者の養成を目的としており、設定されている理念・目的からその目指す方向性は明らかである。その上で、各学科の独自性を尊重しつつ、学部と学科の教育理念・目的の有機的な関連性が明示されることが望まれる。

理念・目的の適切性の検証は執行部主導のもと実施するプロセスが明確化されており高く評価できる。

学部・学科の教育理念や目的については、学則および規則等に明示されており、法政大学 HP や文学部 HP にて教職員および学生に周知され、社会に対しても公表されている。

2 内部質保証**(1) 点検・評価項目における現状****2.1 内部質保証システム（質保証委員会）を適切に機能させているか。****2.1①質保証委員会は適切に活動していますか。2018年度2.1①に対応**

はい
<p>【2021年度質保証委員会の構成、開催日、議題等】※箇条書きで記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> 文学部質保証委員会の構成……各学科より委員1名が選出され、計6名で構成される。また、執行部（学部長・教授会主任・教授会副主任）がオブザーバーとして毎回、出席する。 2020年度中に開催された委員会に新旧委員が出席して以下について審議した。①自己点検・評価シートの年度末報告、②2021年度委員長の選出、③2021年度文学部質保証委員会の役割、④「自己点検・評価シート」チェックのスケジュールについて、⑤「自己点検・評価シート」のチェック体制・方法について。 第1回委員会：2021年10月13日。主な議題、①2021年度大学評価報告書の報告、②2021年度質保証委員会活動の検討。 第2回委員会：2022年1月19日。主な議題、①2021年度の教学上の工夫や取り組みに関する各学科からの報告、②学生アンケート調査結果についての意見交換。 第3回委員会：2022年2月25日。主な議題、①自己点検・評価シートの年度末報告、②2022年度の質保証委員会・委員長の選出、③2022年度文学部質保証委員会の役割、④2022年度「自己点検・評価シート」チェックのスケジュールについて、⑤「自己点検・評価シート」のチェック体制・方法について。

2.1②質保証委員会等の内部質保証推進組織は、COVID-19への対応・対策の措置を講じるにあたってどのような役割を果たしましたか。新規

<p>※取り組みの概要を記入。</p> <p>2020年度文学部質保証委員会においては、各学科のオンラインを用いた教育の取り組みが報告された。様々な手続きやガイダンス、学生サポートなどがオンラインで行われたことが報告された。また、Hoppii や Zoom によるオンライン授</p>
--

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた、B：改善することができなかった。」を意味する。

業の実施方法など、情報交換がなされた。

2021 年度文学部質保証委員会においては、各学科より持ち寄られたオンライン・ハイフレックス形式の授業での問題点、および対策が報告された。対面に比べ、オンライン形式では受講生の反応を得る手がかりが限られ、議論が活発化しにくいという問題点があげられた。一方、授業時に様々なアプリケーションや周辺機器を利用することにより、より効果的にオンライン授業を行う工夫が報告された。

これらの質保証委員会での情報交換の結果は、文学部定例教授会にて報告された。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・2020 年度第 10 回文学部定例教授会資料 13 「2020 年度質保証委員会報告」
- ・2021 年度第 11 回文学部定例教授会資料 6 「2021 年度文学部質保証委員会活動報告」

(2) 長所・特色

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、取り組み内容から「長所」や「特色」として特記すべき事項を記入。なお、現在「長所」や「特色」として特記すべき事項がなかった場合は、今後さらに「長所」や「特色」とする取り組み等を向上させていくために課題と考えられる点やその対応計画を記入していただく等できる限り記入をしてください。

内容
<ul style="list-style-type: none"> ・文学部では 2020 年度質保証委員会から COVID-19 への各学科の取り組みをまとめるとともに情報共有を図っており、2021 年度以降の対応を考えるために役立てることができた。 ・年度当初の質保証活動を円滑に進めるため、前年度のうちに新旧委員が出席して自己点検スケジュールについて確認するなどの対応をとっている。

(3) 課題・問題点

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、改善を要すると判断される「課題・問題点」として特記すべき事項を記入。なお、「課題・問題点」に対する改善計画がある場合には、その具体的な計画（既の実施している場合にはその進捗状況も含めて）をあわせて記入してください。「課題・問題点」を認識し改善につなげるためにできる限り記入をしてください。

内容
特になし。

【内部質保証の評価】

文学部における質保証委員会は、各学科から 1 名ずつ選出される 6 名で構成されており、執行部（学部長、教授会主任・教授会副主任）がオブザーバーとして毎回出席している。2020 年度も委員会を 3 回開催し、自己点検・評価活動に関する事項や教学上の工夫や取り組みに関すること、学生アンケートの調査結果が議題となるなど、適切に活動していると評価できる。

また、COVIT-19 への対応・対策では、2021 年度はオンライン・ハイフレックス形式の授業での問題点やその対策が各学科より質保証委員会の場に持ち寄せられ情報交換が行われたほか、より効果的にオンライン授業を行う工夫が報告されるなど、情報を共有し対応を検討するうえで十分な役割を果たしたと言える。

3 教育課程・学習成果

(1) 点検・評価項目における現状

3.1 授与する学位ごとに、学位授与方針を定め、公表しているか。

3.1①学部（学科）として修得すべき学習成果、その達成のための諸要件（卒業要件）を明示した学位授与方針を設定していますか。2018 年度 3.1①に対応

はい

3.2 授与する学位ごとに、教育課程の編成・実施方針を定め、公表しているか。

3.2①学生に期待する学習成果の達成を可能とするための教育課程の編成・実施方針を設定していますか。2018 年度 3.2①に対応

はい

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。
 ※注 2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ
 ※注 3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた、B：改善することができなかった。」を意味する。

3.2②教育目標、学位授与方針、教育課程の編成・実施方針を周知・公表していますか。2018年度3.2②に対応

はい

【根拠資料】※冊子名称やホームページURL等。

・『文学部履修の手引き』

(https://hosei-hondana.actibookone.com/content/detail?param=eyJjb250ZW50TnVtIjoxNzAxMjQsImNhdkVnb3J5TnVtIjo2ODAlfQ==&pNo=1)

・web シラバス (文学部)

(https://syllabus.hosei.ac.jp/web/show.php?gakubueng=AB&t_mode=pc)

・教育目標 (http://www.hosei.ac.jp/gaiyo/rinen/hoshin/mokuhyo/gakubu.html)

・学位授与方針 (http://www.hosei.ac.jp/gaiyo/rinen/hoshin/gakui_juyo/gakubu.html)

・教育課程の編成・実施方針 (http://www.hosei.ac.jp/gaiyo/rinen/hoshin/kyoiku_katei/gakubu.html)

3.2③教育目標、学位授与方針、教育課程の編成・実施方針の適切性と関連性の検証プロセスを具体的に説明してください。

2018年度3.2③に対応

A：従来通り効果的に取り組むことができた

※検証を行う組織(教授会や各種委員会等)や検証の時期等、検証プロセスを記入。

学部・学科における教育目標、学位授与方針、教育課程の編成・実施方針の適切性の検証は、執行部の主導のもと、教授会、教学改革委員会、各学科の学科会議において実施される。そのプロセスは原則として以下のとおりとなる。

【1】教授会：検証実施の決定。→【2】教学改革委員会：検証方法の決定。→【3】学科会議：検証の実施。→【4】教授会：検証結果の承認。

なお、検証の時期については固定化されていないが、2021年度においては、4月から5月にかけて実施した。

【2021年度に改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

特になし。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・2021年度第1回 教学改革委員会(拡大)議事録

3.3 教育課程の編成・実施方針に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。

3.3①学生の能力育成のため、教育課程の編成・実施方針に基づいた教育課程・教育内容が適切に提供されていますか。2021

年度1.1①に対応

S：さらに改善することができた

※教育課程の編成・実施方針との整合性の観点から、学生に提供されている教育課程・教育内容の概要を記入。

各学科とも、学部・学科の教育課程の編成・実施方針にもとづき、適切な教育課程・教育内容を提供している。すなわち、学科ごとに概論科目と多様な講義科目を設け、専門分野の学問内容を深く、かつ網羅的に学べるカリキュラムを構築している。また、ゼミナール科目を年次ごとに多数開講することによって、専門分野の研究方法を身につけ、プレゼンテーション、ディスカッション、課題発見・解決能力を高める教育に力を入れている。特に、ゼミナールとその延長にあたる卒業論文は必修科目として位置づけられており、文学部の教育の最大の特徴となっている(SSI学生は選択制)。また、哲学・英文学・史学・心理学の各学科では、大学院科目の履修も認めており、自身の学習活動をより高度なものへと高める場も設けている。さらに、幅広い教養の涵養を図るためのILAC科目、文学部共通科目、他学部・他学科公開科目等を含めることにより、幅広い視野と教養を身につけることが可能となっている。

なお、上記以外の各学科の教育課程・教育内容の特徴は以下のとおりである。

【哲学科】

専門科目の中心に位置付けられる「哲学特講」(2~4年次)、「哲学演習」(3・4年次)については、各担当教員の専門分野を生かしながら、幅広い分野にわたる授業内容を提供している。「哲学特講」については、春・秋学期で担当教員を代え、学生の多様な問題関心に対応するように、教育内容に多様性をもたせている。とくに「国際哲学特講」では、ハイデルブルク大学(ドイツ)、ストラスブール大学(フランス)との合同ゼミなどを通じて、学生の国際性の涵養に努めている。

【日本文学科】

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた、B：改善することができなかった。」を意味する。

2年次以降は文学・言語・文芸の3コース制を採用している。学生はコース別の必修科目と「ゼミナール」、および各コース共通で履修できる選択必修科目・選択科目を通して、諸領域にわたる知識を深く身につけることができる。なお、文芸コースでは原則として卒業制作（創作作品）を提出することとなっている。

【英文学科】

「英語という言語が基礎にある学科」という特徴を活かし、英米文学、英米文化から英語学、言語学、英語教育学まで、幅広い領域を学べるように工夫されている。また、英文学科派遣留学制度（SA）を設けて国際化に対応し、国際社会に貢献しうる能力をもった人材を育成している。

【史学科】

専門基礎科目、専攻系科目、特講系科目、実習系科目、演習（ゼミ）に分け、学生の知識・能力の深化に合わせた教育内容を提供している。史資料分析のための方法論、歴史像を構築するための理論と知識にわたり、包括的かつ実践的に習得できるカリキュラムを構築している。

【地理学科】

1年次に「地理学概論(1)・(2)」「地理実習(1)・(2)」等を通じて、大学で学ぶ地理学の体系と方法論の基礎を習得し、2年次以降は選択必修科目と選択科目によって地理学の専門的な方法論や知識を学ぶとともに、「現地研究」において習得した方法論の実践を図ることとしている。

【心理学科】

論文の検索の仕方、読み方、データの分析の仕方、プレゼンテーションの仕方といったスキルに関しては、1～4年次の全学年において演習形式で行い、卒業論文につなげている。また、心理学を生かした職業選択を支援することも視野に入れ、現場で働いている学外の特別講師を毎年招聘し、講演会を実施している。

【2021年度に改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

各学科の教育理念、ディプロマ・ポリシーに基づき、各学科の専門科目と幅広い知識や教養を身につける教養科目を併せ、学科としての設置科目全体のカリキュラムの見直しに着手した。新カリキュラムの2023年度施行を目指して、2021年度には、学部執行部から各学科への趣旨説明に始まり、各学科会議において改変内容に関し検討を続けるとともに、教学改革委員会および教授会においても意見交換を行った。また、年度末にはカリキュラム改革についての「調整会議」を開き、次年度の学則改定に向けた準備を行った。

【根拠資料】※カリキュラムツリー、カリキュラムマップの公開ホームページURLや掲載冊子名称等

- ・文学部カリキュラム・マップ、カリキュラム・ツリー
(<http://www.hosei.ac.jp/bungaku/shokai/curriculum/index.html>)
- ・『文学部履修の手引き』
(<https://hosei-hondana.actibookone.com/content/detail?param=eyJjb250ZW50TnVtIjo2020DA1fQ==&pNo=1>)
- ・web シラバス・文学部
(https://syllabus.hosei.ac.jp/web/show.php?gakubueng=AB&t_mode=pc)
- ・web シラバス・市ヶ谷リベラルアーツセンター（ILAC）
(https://syllabus.hosei.ac.jp/web/show.php?gakubueng=AX&t_mode=pc)
- ※以下、文学部カリキュラム・マップ、カリキュラム・ツリー、『文学部履修の手引き』、web シラバスについては URL を省略する。
- ・『文学部英文学科 Study Abroad Program』（学生への配付パンフレット）
- ・法政心理ネット (<http://www.hosei-shinri.jp/psychology/post-21.php>)
- ・2021年度 第5、7、8、9、10、11回 文学部定例教授会議事録

3.3②学生の能力育成の観点からカリキュラムの順次性・体系性を確保していますか。2021年度1.1②に対応

A：従来通り効果的に取り組むことができた

※カリキュラム上、どのように学生の順次的・体系的な履修（個々の授業科目の内容・方法、授業科目の位置づけ（必修・選択等）含む）への配慮が行われているか。また、教養教育と専門科目の適切な配置が行われているか、概要を記入。

各学科とも、1年次に初年次教育にあたる「基礎ゼミ」（日本文学科のみ「大学での国語力」「ゼミナール入門」として実施。以下、これらを「基礎ゼミ」等と略す）や概論科目を、2年次以降、より専門性の高い科目を開設している。また、2～3年次ないし3～4年次に「ゼミナール」「演習」（各学科で名称を異にするため、以下、最も代表的な呼称である「ゼ

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。
 ※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ
 ※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた、B：改善することができなかった。」を意味する。

ミナール」(演習)と称す)を開設し、調査・研究・発表を主体とした教育を実施している。4年次には全学科で「卒業論文」を必修として課すことにより、論理的な思考力・表現力の養成に力を入れている。各科目は、必修科目・選択必修科目・選択科目・自由科目(心理学科のみ、必修科目・学科基礎科目・展開科目・自由科目と称す)の系列に分類され、学科の専門領域を幅広くかつ体系的に学ぶことができるようになっている。また、1年次より学科の専門科目とILAC科目の双方が学べるよう配慮されている。

なお、各学科のカリキュラムの順次性・体系性の特徴は以下のとおりである。また、その体系は学科ごとにカリキュラム・マップ、カリキュラム・ツリーの形式でも公開している。

【哲学科】

ゼミ形式の授業として、1年次に「基礎ゼミ」、2年次に「基礎演習」、3・4年次に「哲学演習」を開設し、4年間を通じて段階的で継続した能力形成が可能なカリキュラムとなっている。また、1・2年次に概論科目、ILAC科目を履修したあと、2・3年次に特殊講義、選択科目の履修を通じて視野の拡大を図り、広い教養に支えられた専門性の証としての「卒業論文」の執筆につなげている。

【日本文学科】

1年次春学期に国語基礎力育成のため「大学での国語力」、秋学期にゼミ教育への導入として「ゼミナール入門」を開設している。2年次からは文学・言語・文芸の3コース制を取り、学生は「ゼミナール」の所属によって所属コースが決まる。各コースのカリキュラムは、共通の必修科目3科目(1年次ないし2年次以降開設)を土台に、コース別必修科目2科目を柱とし、さらに選択必修、選択、自由科目を配することにより体系化されており、卒業論文・卒業制作につなげている。

【英文学科】

1年次には初年次教育として「基礎ゼミ」を開設するほか、英米文学、英語学、言語学の基礎的な講義科目を履修可能としている。2年次以降、専門的内容をもつ講義科目や、英語力の集中的な育成を図るための英語表現演習科目を開設している。また、2年次春学期にはゼミにおける専門研究への導入のため、「2年次演習」を開設している。3年次からは英米文学、言語学、英語学、英語教育学等の各分野のゼミを開設し、卒業論文執筆に向けた指導を行っている。

【史学科】

1年次に導入科目として「基礎ゼミ」を開設するほか、日本史・東洋史・西洋史の各概説および各序説を開設している。2年次には、基本的な方法論の習得のため「史学概論」「考古学概論」を開設している。2年次以降、日本史・東洋史・西洋史の3専攻制を取り、専攻系(時代史)講義科目で専攻分野の知識を深化させ、より専門性の高い特講系講義科目への連絡を図っている。さらに、研究方法習得のための演習(ゼミ)と、史資料の扱い方、外国語論文読解力養成のための実習系科目を開設している。これらの科目を2・3年次に履修することで、4年次の卒業論文執筆に結びつけている。

【地理学科】

1年次に「基礎ゼミ」のほか、地理学の体系と方法論の基礎を習得するための「地理学概論(1)・(2)」「地理実習(1)・(2)」を開設している。2年次からは選択必修科目、選択科目によって多岐にわたる知識、方法論を学び、習得した方法論を「現地研究」(フィールドワーク)において実践する。2017年度入学生以降は3・4年次における「演習」の履修により、4年次の「卒業論文」につなげる編成をとる。

【心理学科】

認知系科目群と発達系科目群を柱に、体系的な教育課程を編成している。1年次には学科基礎科目を設置し、2年次からは専門性の高い学科展開科目を比較的自由に履修できるよう設置している。また、1年次には初年次教育としての「基礎ゼミ」、心理学への興味を高め、基礎的なスキルを習得するための「心理学基礎実験Ⅰ・Ⅱ」、2年次には研究論文の読み方や実験方法を学ぶ「演習Ⅰ・Ⅱ」、3年次以降は心理学分野での研究活動を一人で行うことにより、それまでに習得した知識・技能を活用する方法を学ぶ「研究法Ⅰ・Ⅱ」を設置し、最終的に4年次の「卒業論文」につなげられるように編成している。

【2021年度に改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

特になし。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・文学部各学科のカリキュラム・マップ、カリキュラム・ツリー
- ・『文学部履修の手引き』
- ・web シラバス・文学部

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S:さらに改善することができた、A:従来通り効果的に取り組むことができた、B:改善することができなかった。」を意味する。

3.3③幅広く深い教養及び総合的な判断力を培い、豊かな人間性を涵養する教育課程が編成されていますか。2021年度 1.1③

に対応

S： さらに改善することができた

※カリキュラム上、どのように教養教育等が提供されているか概要を記入。

各学科とも幅広く深い教養を習得することに加え、学科の専門性の高い知識・方法を習得することを両立し、総合的な見識や判断力を養成することを重視している。そのため、卒業所要単位数には ILAC 科目と学部専門科目それぞれに一定の単位数を修得することが定められている。ILAC 科目は 0 群、1 群（人文科学分野）、2 群（社会科学分野）、3 群（自然科学分野）、4 群（外国語）、5 群（保健体育分野）から構成されており、群ごとに必要単位数を設定することにより、幅広い領域の教養を身につけることができるよう配慮されている。また、ILAC 科目の中には、教養をより発展的に学ぶ科目群として「総合科目」「教養ゼミ」も設けられており、ここで修得した単位は専門科目のうち、自由科目として認定されている（哲学科・日本文学科・英文学科・史学科・地理学科では、「総合科目」の一部が専門科目のうちの選択科目として位置づけられている）。加えて、文学部内では学科間で科目の共有が行われているほか、2 年次からは他学部・他学科公開科目も履修可能となっており、隣接する領域や他の専門領域をより深く学ぶ場が提供されている。特に、他学部公開科目においては「法政大学 SDGs サティフィケート」を設け、SDGs の 17 の各目標に沿った科目を体系的に履修できる制度を、全学的な意思決定にもとづき、2019 年度から導入している。さらに 2020 年度には、市ヶ谷キャンパスの他学部他学科公開科目を基盤に「アーバンデザイン・サティフィケート」が設けられ、現代都市の課題、都市と文化を文理融合の視点で学ぶプログラムが開始された。文学部でも科目提供を行い、学生の履修を推奨している。

また、日本文学科・史学科・地理学科・心理学科に加え、新たに哲学科が 2021 年度春学期より、英文学科が 2022 年度春学期より千代田区キャンパスコンソーシアム単位互換に参加した。対象は派遣・受け入れとも GPA3.0 以上の学生に限定しているが、意欲のある学生には参加大学が提供する幅広い科目の受講が可能となった。

なお、文学部では 2011 年度より、社会倫理の涵養をめざし、「現代のコモンセンス」を開講していることも、特徴としてあげられる。

【2021 年度に改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価で S を選択した場合に具体的な内容を記入。

2021 年度春学期より新たに哲学科が、2022 年度春より英文学科が千代田区キャンパスコンソーシアム単位互換に参加し、文学部のすべての学科が千代田区コンソーシアムに参加することになった。また、「卒業論文の特例的な措置」を 4 年次の 1 年間留学する学生に対しても拡充することを決定した。

市ヶ谷コミュニティ連携会議における策定にもとづき、2021 年度より「ダイバーシティ・サティフィケート」に参加し、同サティフィケートに「比較文化論(1)」「イスラム文化論Ⅰ・Ⅱ」「民俗学Ⅱ」を提供している。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・『文学部履修の手引き』
- ・web シラバス・市ヶ谷リベラルアーツセンター（ILAC）
- ・2021 年度第 9、10 回 文学部定例教授会議事録
- ・2021 年度第 10 回 文学部定例教授会 配布資料 14-1、14-2
- ・2021 年度ダイバーシティ・サティフィケート科目構成表
(https://www.hosei.ac.jp/kyoiku/tayosei/sogo/certificate_program/)
- ・2021 年度第 7 回 文学部定例教授会 資料 3
千代田区内近接大学の高等教育連携強化コンソーシアムの取り組み
(<https://www.hosei.ac.jp/hosei/renkei/shakai/chiyoda/#3>)

3.3④初年次教育・高大接続への配慮は適切に行われていますか。2021年度 1.1④に対応

A： 従来通り効果的に取り組むことができた

※初年次教育・高大接続への配慮に関し、どのような教育内容が学生に提供されているか概要を記入。

学士課程教育への円滑な移行に必要な初年次教育として、哲学科・英文学科・史学科・地理学科・心理学科では ILAC 科目の中に「基礎ゼミ」を開講し、日本文学科では専門科目の中に「大学での国語力」「ゼミナール入門」を開講している。これらの科目では、文章読解、ディベート、プレゼンテーション、レポート作成、資料探索技術等を扱い、大学での学びに必要な基礎的な能力を身につけることがめざされている。

一方、高大接続に関しては、法政大学高等学校 3 年生を対象に一部の専門科目の聴講を認めている（ただし、まだ実績

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注 3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた、B：改善することができなかった。」を意味する。

はない。

なお、上記以外の学科固有の取り組みとして、以下のものがあげられる。

【史学科】

史学科では日本史・東洋史・西洋史を広く学ぶカリキュラムが設定されているため、高等学校までの日本史・世界史の学習状況を考慮し、必ずしも学習が十分でない者を主な対象として、2017年度から各分野の通史を1 Semesterで学ぶ「日本史序説Ⅰ・Ⅱ」「東洋史序説」「西洋史序説」を開設し、他学科にも公開している。

【2021年度に改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

特になし。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・『文学部履修の手引き』
- ・web シラバス・文学部
- ・web シラバス・市ヶ谷リベラルアーツセンター (ILAC)
- ・2021年度 第7回 教学改革委員会 資料 11

3.3⑤学生の国際性を涵養するための教育内容は適切に提供されていますか。2021年度1.1⑤に対応

S： さらに改善することができた

※学生に提供されている国際性を涵養するための教育に関し、どのような教育内容が提供されているか概要を記入。

ILAC 科目に英語および諸外国語科目を設置し、必修科目に指定している。また、英語強化プログラム (ERP)、グローバル・オープン科目、交換留学生受入れプログラム (ESOP) のうちの英語開講科目、「短期語学研修」「国際ボランティア」「国際インターンシップ」が履修可能になっている。これらの科目は専門科目のうち、自由科目として認定されている (英文学科では一部、選択必修科目に認定されている)。2020、2021年度はコロナ禍の下で留学やSAの実施は制限され、実績は少なくなっているものの、オンラインプログラムの拡充などの対応を行い、制度を廃止せずにポストコロナに備えている。

なお、上記以外の各学科における取り組みは以下のとおりである。

【哲学科】

2011年度より「国際哲学特講」(秋学期2単位)を開講している。本科目では、アルザス欧州日本学研究所 (CEEJA) の協力で、2月初めに海外研修を実施し、ハイデルベルク大学 (ドイツ)、ストラスブール大学 (フランス) と合同ゼミを行っている。また授業期間中にも、オンラインを活用して合同授業や個別の交流を活発に行っている。そのことを通じて、異文化への関心の喚起や自国文化の見直しを促し、学生の国際的な意識の涵養に取り組んでいる。

※2020、2021年度はコロナ禍のため、2月初めの現地研修は行わず、代わりにオンライン研修を行った。

【日本文学科】

日本語・日本文学に関心をもつ留学生を積極的に受け入れるとともに中国文学に関する科目をゼミナール・選択必修科目・選択科目において開講し、日本文学を相対化してとらえる視点を提供している。他にも海外の視点から日本を相対化して見つめなおす「日本文芸研究特講 15 国際日本学」や、日本語と外国語の比較研究が可能な「ゼミナール 22」を開講している。

【英文学科】

米国のフォントボン大学の秋学期 SA (長期)、アイルランドのユニヴァーシティ・カレッジ・ダブリンの夏期 SA (短期) と秋学期 SA (長期) という3種のプログラムからなる学科独自の派遣留学制度 (SA) を設け、短期 SA については1年次からの参加を積極的に勧めている。カナダのヴィクトリア大学の秋学期 SA (長期) の開始も2020年度に決定した。プログラム終了後には毎年 SA 報告会を開いている。また、留学先で修得した単位については、学科・学部の審議を経たうえで、SA 認定科目として認定している。

※2021年度の各 SA は COVID-19 の世界的な流行のため、中止となった。2022年度の各 SA 渡航プログラムについても中止を決定したうえで、国際交流プログラムを継続的に行うため措置として2022年度にはヴィクトリア大学 (カナダ・ブリティッシュコロンビア州) でのオンライン SA を実施することを決定した。

【史学科】

外国史の科目では多様な地域を対象とするとともに、東洋史専攻・西洋史専攻の各演習では中国語・英語の原書を読むことを義務づけている。さらに、中国の龍門石窟、復旦大学文物與博物館学系、少林寺と学術協定を締結し、学生の国際

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた、B：改善することができなかった。」を意味する。

性の涵養に努めている。特に、国際性涵養の一環として復旦大学文物與博物館学系の協力のもと学生が主体的に学習プログラムを組み、相互に研究発表など意見交換の場をつくる取り組み（2019年度は南京師範大学にて開催）を行っている。

※2020年度の中国での研修はCOVID-19の世界的な流行のため、中止となった。

【地理学科】

外国語を通じて地理学を学ぶための「外書講読」を開講するとともに、世界の各地域に対応した「世界地誌」等を開講し、学生の海外諸地域に対する理解を深めている。韓国・台湾・中国をフィールドとする「現地研究」を実施する年もあり、学生自らが異文化を体験する機会を設けている。

【心理学科】

多くの留学生を積極的に受け入れている。また、「演習Ⅰ」などの演習系科目や、「心理学英語Ⅰ・Ⅱ」を通じて、英文学術雑誌の講読を行い、国際的な場での発表を可能にする語学力の養成に努めている。さらに、専任教員が主導して大学院入試を視野に入れた自主英語勉強会を定期的に開催し、授業外でも英語力の強化に取り組んでいる。

【2021年度に改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

2020年度に引き続き、COVID-19の影響により海外への渡航は制限されたが、2022年度以降、感染症の影響が続いた場合でも継続的に制度を維持し、国際性を涵養するための学びを維持すべく、オンラインを取り入れた授業方式や留学方式を拡充した。哲学科の「国際哲学特講」では海外での現地研修をオンラインで実施し、英文学科では2022年度は中止となったSAプログラムの代替として、オンラインSAを行うことを決定した。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・『文学部履修の手引き』
- ・web シラバス・文学部
- ・web シラバス・市ヶ谷リベラルアーツセンター (ILAC)
- ・2021年度「国際哲学特講」オンライン海外研修の報告（学部執行部・学科へ配布し、哲学科サイト <https://philos.ws.hosei.ac.jp> に掲載）
- ・『文学部英文学科 Study Abroad Program』（学生への配布資料）
- ・2021年度第1、2、8、9回文学部定例教授会議事録
- ・2021年度第2回文学部定例教授会 資料6、7
- ・2021年度第9回文学部定例教授会 資料16、17、18、19

3.3⑥学生の社会的及び職業的自立を図るために必要な能力を育成するキャリア教育は適切に提供されていますか。2021年度

1.1⑥に対応

S：さらに改善することができた

※学生に提供されているキャリア教育に関し、どのような教育内容が提供されているか概要を記入。

ILAC科目の中に「キャリアデザイン入門」「キャリアデザイン演習」（ともに1年次）、「就業基礎力養成」（1～4年次）を設置し、初年次よりキャリア教育を実施している。また、文学部では、学部共通科目として「文学部生のキャリア形成」「現代のコモンセンス」（ともに2～4年次）を設置している点も、特徴としてあげられる。当該科目では、文学部生としての立場を生かしたキャリア形成への意識を高めるため、本学文学部卒業生による講義がオムニバス形式で実施されている。「文学部生のキャリア形成」はオンライン授業として開講されており、全国各地、および海外で活躍する卒業生を講師として迎えることが可能な体制が整えられている。

なお、上記以外の各学科の取り組みは以下のとおりである。

【哲学科】

哲学科生に向けた「哲学科就職セミナー」を年1回開催し、キャリアセンター職員や卒業生などによる講演を行い、就職活動を含め、キャリア形成に向けた情報提供と学生の意識向上を図っている（ただし、2020年、2021年度はCOVID-19の影響で中止となった）。

【日本文学科】

「メディアと社会」「編集理論A・B」「編集実務A・B」「表現と著作権」を開設し、出版業界への就職を希望する学生に向けたキャリア教育を実施している。

【英文学科】

最近はコロナ禍で実現していないが、LINKSの活動で、卒業生によるキャリアの話を紹介している。

【史学科・心理学科】

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた、B：改善することができなかった。」を意味する。

「基礎ゼミ」においてキャリアセンター職員によるガイダンスを実施し、学生が1年次よりキャリア形成に向けた意識を高める取り組みを行っている。

【地理学科】

講義時間外に、地理学科卒業生による、地理学に関連した地図製作会社等の企業説明会を開催している（2021年度はZoomを活用し、開催した）。

地理学科サイトに、「卒業生の進路」や「卒業生の声」を掲載している。

【2021年度に改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

2021年度には「文学部生のキャリア形成」をオンライン科目として行うことを決定した。国内遠方や海外など、遠隔地からの講師の招聘が可能な体制を整えることができた。このことにより、出校を伴うことによる講師の負担が軽減される。また、外部講師は東京近郊在住者に限られていたが、オンライン化により講師の選定の幅が広がる。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・『文学部履修の手引き』
- ・web シラバス・文学部
- ・web シラバス・市ヶ谷リベラルアーツセンター（ILAC）
- ・哲学サイト（<https://philos.ws.hosei.ac.jp/>）に「哲学就職セミナー」案内掲載
- ・地理学科サイト・卒業生の進路（https://geo-net.ws.hosei.ac.jp/?page_id=969）
- ・地理学科サイト・卒業生の声（https://geo-net.ws.hosei.ac.jp/?page_id=1729）
- ・2021年度第5回文学部定例教授会 資料4-2

3.4 学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。

3.4①学生の履修指導を適切に行っていますか。2021年度1.2①に対応

A： 従来通り効果的に取り組むことができた

【履修指導の体制および方法】※箇条書きで記入。

- ・各学科専任教員：4月にオリエンテーション（1年次生対象）、在学生ガイダンス（2年次以降の学生対象）を実施。
 - ・学務部学務課文学部担当：4月に学部ガイダンス（1年次生対象）を実施。
- そのほか、各学科の取り組みは以下のとおりである。

【哲学科】

- ・4月初めに新4年生による主に新入生を対象とした履修相談を実施している。
- ・各ゼミ（哲学演習）の初回授業はオンラインで実施し、ゼミ紹介と卒業論文指導に関する説明を行っている。3年生以上の学生には、なるべく多くのゼミの初回授業に参加し、ゼミ選択の参考にするよう指導している。

【日本文学科】

- ・学科内留学生サポート小委員会による「留学生相談会」を開催している。
- ・新入生を対象とした懇談会として、例年4月に「新入生歓迎会」を開催し、同時にオフィスアワーの利用促進を図るため、そのまま新入生を連れて研究室訪問も実施している。
- ・1年次後半に「コース・ガイダンス」および「ゼミ説明会」を開催し、3コース制やゼミナールに関する説明を行っている。
- ・コースや研究分野に対応した5つの履修モデルを日本文学科公式サイトで公開している。
- ・4年次への進級や卒業履修要件の充足をめざし、履修状況の確認を学生各自で行う「3年次履修チェックリスト」を日本文学科公式サイトで公開している。
- ・『卒業論文執筆のてびき』を配布し、卒業論文（卒業制作）の指導を行っている。

【英文学科】

- ・新入生の学習支援の一環として、4月初旬に「時間割相談会」を実施し、上級生に時間割作成上のアドバイスをもらう機会を設けている。
- ・例年4月に「新入生歓迎会」を実施している。
- ・例年5月に全専任教員が1年生全員を対象にしたグループ単位の「新入生面談」を行い、履修状況を把握し、必要に応じて個別に追跡調査を実施している。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた、B：改善することができなかった。」を意味する。

・11月～12月に、1年生を対象に「2年次演習」説明会、2年生を対象にゼミ制度説明会、3年生を対象に卒論説明会を実施している。

【史学科】

・1年生には基礎ゼミと、5月に行われる全ての1年生を対象とした新入生面談とにおいて、2年生以上にはそれぞれが所属する演習（ゼミ）において、専任教員が直接、履修上の注意を行うとともに、学生からの履修上の相談にも応じている。

・1年生には、11月にゼミ説明会を開催し、ゼミ選択・履修の相談にも応じている。

【地理学科】

・新入生を対象に5月～6月にかけて、全教員に学生を振り分けて個別に「新入生面談」を行い、学習の状況や生活について相談を受け、適宜学科会議で情報共有し、対応を検討している。

・秋学期に行っている地理学科独自の卒論ガイダンスにおいて、卒業論文指導教員の選択手続の方法や、卒論作成にかかわる具体的な要領について詳しく説明している。

・『地理学科の葉』を配付し、『文学部履修の手引き』に書かれていない地理学科教員の詳しい紹介や取得できる資格などについて説明している。また、地理学科ウェブサイトにおいて、葉の内容に加え、最新の情報についても提供している。

・ラーニングサポーター制度を活用し、2021年度は新入生、新2年生を対象とした4年生（5名）修士課程1年生（1名）による履修ガイダンスを実施した（2021年4/6、参加人数1年生47名、2年生5名）。

【心理学科】

・1年生に対しては、専任教員によるグループ面談、心理学科の上級生で構成されるピアサポーターによる履修講習会を通じて履修指導を行っている。学科のカリキュラムなどを解説した資料を配布し、Zoomで質問に回答している。

・2～4年生に対しては、学科のカリキュラムを解説した資料を作成し、在学生ガイダンスで配付している。

・2年生に対しては、ピアサポーター主催のゼミ説明会を行っている。

【2021年度に改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

COVID-19により登校が困難ななかでも新入生が履修計画を円滑に立てられるよう、ラーニングサポーター制度を活用し、上級生による履修相談会等を開催するよう、執行部より各学科へ要請を行った。これを受け、2021年度は、哲学科では、春学期授業開始前に、ラーニングサポーター制度を活用して、上級生による新入生のための履修相談会をZoomによって複数回実施した（4月4日に3グループ、4月5日に2グループ、の計5つの時間帯で実施）。日本文学科では、授業開始前に「新入生のためのZoom体験会」を実施するとともに、LINEのOpenChatという機能を利用して、留学生を含む新入生からの質問や履修相談に先輩学生が答える「日本文学科のつどい」という広場を開設した。英文学科では、ラーニングサポーター制度を活用して、4月5日に新入生を対象とした時間割相談会を開催し、新入生が上級生にアドバイスをもらえる機会を提供した。史学科では、新入生および2年生へHoppiiやZoomの使い方など技術的な面でのアドバイスを中心に行った。地理学科では、2021年4月6日12:00～15:00に在学生（4年生、大学院1年生）による履修ガイダンスを実施した。1年生だけでなく、2年生にも開放し、多くの1年生、2年生に利用された。1年生の参加者数47名、2年生の参加者数5名、計52名であった。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・2020年度第9回教学改革委員会議事録

【哲学科】 新入生ガイダンス配付資料、在学生ガイダンス配付資料

【日本文学科】 『卒業論文執筆のてびき 第7版』、留学生サポート小委員会履修相談資料

日本文学科サイト・専門科目の履修モデル

(http://nichibun.ws.hosei.ac.jp/wp/?page_id=1153)

日本文学科サイト・日本文学科3年次履修チェックリスト

(<http://nichibun.ws.hosei.ac.jp/wp/wp-content/uploads/2016/04/0602e18f0b2205f5eccc19dcead869fe.pdf>)

【英文学科】 新入生オリエンテーション配布資料・動画、在学生ガイダンス用配布資料・動画

【史学科】 在学生ガイダンス配付資料

【地理学科】 『地理学科の葉』

地理学科サイト・カリキュラム (https://geo-net.ws.hosei.ac.jp/?page_id=979)

【心理学科】 新入生オリエンテーション配布資料・動画、在学生ガイダンス用配布資料・動画

3.4②学生の学習指導を適切に行っていますか。2021年度1.2②に対応

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた、B：改善することができなかった。」を意味する。

A：従来通り効果的に取り組むことができた

※取り組み概要を記入。

すべての専任教員がオフィスアワーを設け、面会時間・場所を『文学部履修の手引き』に公開し、個々の学生への学習相談に対応している。

また、各学科とも1年生に対しては「基礎ゼミ」等において、2年生以上に対しては「ゼミナール」「演習」を通じて、担当教員による学習指導が行われている。さらに、4年生に対しては、必修の卒業論文を通じて、指導教員による研究指導が行われている。その指導計画については、『文学部履修の手引き』において公開されている。

一方、成績不振学生に対しては、各学期、教員との面談形式による学習指導を行い、その結果を学科で集約し、教学改革委員会で報告することとしている。

【2021年度に改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

2019年度より、学習指導の呼び出しに応じない成績不振学生に対し、郵便で通知を出すことにより面談の実施率を高めてきたが、本年度も同様の措置をとり効果をあげた。なお、2020年度に引き続き、2021年度もZoom等を活用し、面談を実施した。成績不振が長期にわたる学生のうち、精神的な病により闘病中であることがすでに報告されている学生については、呼び出し通知を送付することが療養に悪影響を与える場合もあり、個別に適切な対応を考える必要があるとの意見が各学科より出され、対応を引き続き検討することが確認された。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・『文学部履修の手引き』
2021年度第1、5、6、10、11回 文学部定例教授会議事録
2021年度第1回文学部定例教授会 資料12
2021年度第6回文学部定例教授会 資料11
2021年度第10回教学改革委員会議事録

3.4③学生の学習時間（予習・復習）を確保するための方策を行なっていますか。2021年度1.2③に対応

A：従来通り効果的に取り組むことができた

※取り組み概要を記入。

履修登録単位数の上限を、再履修単位を含めて49単位と定め、計画的な単位履修の指導に加え、学生が授業時間外の学習時間を確保できる方策をとっている。個別の科目については、担当教員が各回の「授業計画」「授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）」「参考書」をシラバスに記載し、予習・復習の時間を設けるよう適切に指示・指導している。また、講義科目においては適宜レポート等を課して授業外学習の時間を増やすほか、小テストの実施などを通して予習・復習の促進も図られている。「基礎ゼミ」等、「ゼミナール」「演習」においては、レポート執筆や口頭発表に向けた調査・研究を授業外に実施するほか、必要に応じて学生同士のサブゼミも開催されている。

【2021年度に改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

特になし。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・『文学部履修の手引き』
・web シラバス・文学部

3.4④年間又は学期ごとの履修登録単位数の上限設定を行なっていますか。2018年度3.4④に対応

はい

【履修登録単位数の上限設定】※1年間又は学期ごと、学年ごと等に設定された履修単位の上限を記入。

履修登録単位数の上限は、各年次とも卒業所要単位（専門科目・ILAC科目）のうち、49単位までと定められている。

【上限を超えて履修登録する場合の例外措置】※履修登録単位数の上限を超えて履修できる場合、制度の概要を記入。

・教職科目・資格科目を履修する場合、各年次の登録総合計は、1年次60単位まで、2～4年次68単位までと定めている。
・成績優秀者の他学部科目履修制度においては、8単位まで他学部科目の履修が可能であり、かつ上限を超えて履修する

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた、B：改善することができなかった。」を意味する。

ことが認められている。
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。
・『文学部履修の手引き』 ・「成績優秀者の他学部科目履修制度 履修の手引き【文学部生用】」

3.4⑤教育上の目的を達成するため、効果的な授業形態の導入に取り組んでいますか。2021年度1.2④に対応

A： 従来通り効果的に取り組むことができた
<p>【具体的な科目名及び授業形態・内容等】※箇条書きで記入（取組例：PBL、アクティブラーニング、オンデマンド授業等）。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・文学部ではアクティブ・ラーニングを「講義内容に関連して、学生が書く、話す、発表するといった能動的活動を行い、気づき、発見、認知の変化などが確認できる、あらゆる学習活動である」ととらえ、「基礎ゼミ」「ゼミナール」「卒業論文」のみならず、各種授業においても、学生がこのような学習活動を実践できる仕組みを積極的に導入することを心がけている。 ・大教室における講義科目でも、リアクションペーパーや学習支援システム等を活用した双方向型の授業形態を積極的に導入し、アクティブ・ラーニングが実現できるように努めている。 <p>そのほか、各学科の特色ある取り組みは以下のとおりである。</p> <p>【哲学科】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「基礎ゼミ」ではグループワークや討論を通じて学生間の意見交換を促進している。「基礎演習」「哲学演習」ではアクティブ・ラーニング形式の授業を採用している。 ・一部の「哲学演習」では、受講生の発表をパワーポイントによるプレゼンテーション形式で実施し、哲学の内容を概念図に変換する能力を養成している。 <p>【日本文学科】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「編集実務A・B」で、学生は、DTPソフトを使用して書籍や雑誌の誌面デザインを行ったり、小冊子の制作を行ったりしている。 ・複数の「ゼミナール」で、学生は、直接、古典籍（写本や版本）に触れて研究を行っている。 ・複数の「ゼミナール」で、学生は、論文や小説などを編集し、ゼミ誌を作成している。 <p>【英文学科】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「基礎ゼミ」、「2年次演習」、そして「ゼミ」で学生に発表を課すのに加え、グループワークや相互フィードバックを通じて学生間の意見交換を促進している。 ・また、「英語表現演習（Speaking）」、「英語表現演習（Writing）」において学生に英語で話したり書いたりする機会を継続的に提供している。 <p>【史学科】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「基礎ゼミ」「演習」のほか、実習系科目群のなかで、PBL、アクティブ・ラーニング形式の授業を実施している。 <p>【地理学科】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「基礎ゼミ」「現地研究」「演習」のほか、実習系科目群のなかで、アクティブ・ラーニング形式の授業を実施している。 <p>【心理学科】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業における先進的取り組みについては下記根拠資料にまとめている。そのほか、2016年度からは「心理学測定法I」と「演習II」で、新たにビデオ教材を用いた反転授業を取り入れている（情報メディア教育研究センターとの共同事業）。また、多くの授業で学生による発表などアクティブ・ラーニングを実施している。 <p>【2021年度に改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。</p> <p>学生モニターを対象に「オンライン授業（ハイフレックス形式を含む）への対応」についてのヒアリングを行った。学生と教員双方やりとり、および学生間のインターアクションに関する学生側の意見・要望を教授会で報告した。</p> <p>オンライン授業の活用が円滑に図られるよう、多様なメディアを高度に利用した学修による認定単位の上限を単位互換制度等による認定における修得単位数の上限に算入せず、「多様なメディアを高度に利用した学修」のみで60単位まで修得できるように引き上げた。</p> <p>【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・web シラバス・文学部 ・2021年度第9回教授会 資料8-1

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた、B：改善することができなかった。」を意味する。

- ・第5回拡大教学改革会議 資料5
- ・第5回文学部定例教授会 資料5
- 【地理学科】『地理学科の葉』
地理学科サイト geo-net (<https://geo-net.ws.hosei.ac.jp/>)
- 【心理学科】「2015年度 心理学科 アクティブ・ラーニング、PBL 導入事例」報告書（2016年度心理学科会議資料）

3.4⑥それぞれの授業形態（講義、語学、演習・実験等）に即して、1授業あたりの学生数が配慮されていますか。2021年度

1.2⑤に対応

A： 従来通り効果的に取り組むことができた

※どのような配慮が行われているかを記入。

各学科とも「基礎ゼミ」等、「ゼミナール」「演習」においては、少人数教育を徹底するため、履修者の選抜や科目間での履修者数の調整等を行っている。また、ILAC科目の英語においては1授業あたり24名を履修者の上限とし、諸外国語においても1授業あたりの履修者の上限を設けている。

そのほか、各学科では以下のような配慮を行っている。

【哲学科】

「哲学演習」では、授業形態にふさわしい人数になるように、学生の希望も考慮しつつ学科全体で調整している。

【日本文学科】

必修科目（「日本文芸学概論A・B」「日本語学概論A・B」「日本文芸史ⅠA・B」）・コース別必修科目（「文学概論A・B」「日本文芸史ⅡA・B」「日本語学史A・B」「日本文法論A・B」「日本文学史A・B」「文章表現論A・B」）では、昼間・夜間に同じ授業を1コマずつ開講し、履修者が最大でも150名程度になるよう配慮している。

【英文学科】

ゼミと異なり、授業間で内容が大幅に異ならないと想定される「英語表現演習」について、各コマの最大履修者人数の上限を30名としている。春学期開始前の事前抽選によって、履修者をなるべく均等に振り分ける制度を2021年度に導入した。

【史学科】

実習系の「日本考古資料学」「日本近世史科学」では、学生の専攻を優先して履修者を選抜することで、規模の適正化を図っている。

【地理学科】

実験・実習科目において、履修者数が10名を超える場合、TA（教育補助員）を1名配置し、円滑な実験・実習が行えるようにしている。また、必修科目の「地理実習(1)・(2)」や選択必修の「地学実験(1)・(2)」では、履修者を二つのクラスに分けて春秋で(1)・(2)の履修の順番を代えて受講することで実験室の収容数以内で実習できるようにしている。

【心理学科】

「心理学基礎実験Ⅰ・Ⅱ」「心理学測定法Ⅰ・Ⅱ」「心理検査法Ⅰ・Ⅱ」「心理統計法実習Ⅰ・Ⅱ」「情報処理技法Ⅰ・Ⅱ」においてはクラス指定制をとり、1授業あたりの履修者が30～40名程度になるように調整している。

【2021年度に改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

英文学科では2022年度より、より少人数の授業を実現すべく、クラス指定以外の「英語表現演習（Writing）」、「英語表現演習（Speaking）」の定員を上限25名までに引き下げた。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・web シラバス・文学部

【哲学科】在学ガイダンス配布資料

【日本文学科】ゼミ説明会配付資料

【英文学科】在学ガイダンス配布資料・動画

【地理学科】新入生オリエンテーション配布資料・スライド

【心理学科】「心理学科在学ガイダンス配付資料」

3.4⑦シラバスが適切に作成されているかの検証を行っていますか。2018年度3.4⑦に対応

はい

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた、B：改善することができなかった。」を意味する。

<p>【検証体制及び方法】※箇条書きで記入（取組例：執行部（〇〇委員会）による全シラバスチェック等）。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・前年度（2020年度）のシラバスチェックについては2021年度第2回文学部定例教授会にて報告。 ・2022年度第8回文学部定例教授会にて2022年度分のシラバスチェックを各学科の担当者に依頼。そのほか、各学科における取り組みは以下のとおりである。 <p>【英文学科・心理学科】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・シラバスチェックを全専任教員によって実施している。 <p>【地理学科】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地域調査士、GIS 学術士の資格科目に関しては、必須のキーワードがシラバスに掲載されているかを担当教員がチェックしている。
<p>【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。</p> <p>2021年度第2回 文学部定例教授会 資料12</p> <p>2021年度第8回 文学部定例教授会 資料16</p>

3.4⑧授業がシラバスに沿って行われているかの検証を行っていますか。2018年度3.4⑧に対応

はい
<p>【検証体制及び方法】※箇条書きで記入（取組例：後シラバスの作成、相互授業参観、アンケート等）。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「学生による授業改善アンケート」による確認。 ・一部の授業において相互授業参観を実施。 ・教員個々において、リアクションペーパー等を通じて学生の理解にもとづく、授業の適切な進行を心がけている。 <p>【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2021年度教員による授業相互参観実施状況報告書（2021年度第10回教学改革委員会資料）

3.4⑨通常の教育課程や教育方法に加え、COVID-19への対応・対策として、教育内容、教育方法、成績評価等の一連の教育活動において工夫を講じていますか。行っている場合はその内容と教育活動の効果についても教えてください。2021年度1.2⑥に対応

<p>※取り組みの概要を記入。</p> <p>COVID-19の影響により、2021年度東京都における緊急事態宣言下では、多くの授業でオンライン授業、および厳重なCOVID-19対策を行った上でのハイフレックス授業が継続された。</p> <p>オンライン・オンデマンド授業では学習支援システム、Google Classroom、YouTube等を通じて教材、動画を配信し、授業が一方向的にならないよう、課題やコメントの提出を適宜求めた。自分のライフスタイルに合わせた受講が可能である点、わからない部分を繰り返し学習できる点、学生が提出した課題やコメントに対し、教員が回答を行うことにより、授業内容が深まる点など、効用が確認できた一方、教員側にも教材作成の負担などの問題が残った。Zoom等を利用した同時双方向型の授業では、学生による発表・討論で効果を発揮したほか、チャット機能やブレイクアウトルーム機能等を活用して意見や疑問を出しあうことにより、授業内容を深めることが可能になった。2020年度の授業改善アンケート結果、および文学部質保証委員会報告をふまえ、2021年度には各教員がより効果的なオンライン・ハイフレックス授業の方法を模索し、改善を行った。</p> <p>文学部質保証委員会では、2020年度に引き続き、2021年度の委員会でもCOVID-19蔓延下での効果的な授業方法、問題点、対策についての意見交換を行った。学科で問題点、対策などの意見交換を行った後、質保証委員会にて出された意見や問題点の集約が行われた。質保証委員会での議論は2021年度第11回教授会にて報告された。</p> <p>また、学生モニターを対象に行った調査において「オンライン授業（ハイフレックス形式を含む）への対応」についての学生から意見を聴取した。学生からはオンライン・ハイフレックス型の授業についての意見や要望などが寄せられ、その結果は教授会で報告された。</p> <p>また、地理学科の「現地研究」は、COVID-19蔓延下では、少人数で密を避け、関東圏において日帰りで実施した。また、宿泊を伴う実習はPCR検査を実施し、宿泊施設の個室対応を行うなど、厳重なコロナ対策を行った上で実施した。</p> <p>【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2021年度第9回文学部定例教授会議事録 ・2021年度第11回文学部定例教授会 資料6
--

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた、B：改善することができなかった。」を意味する。

3.5 成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。

3.5①成績評価と単位認定の適切性を確認していますか。2021年度1.3①に対応

A： 従来通り効果的に取り組むことができた

【確認体制及び方法】※箇条書きで記入。

- ・学期ごとに、すべての専任・兼任教員に成績評価・単位認定基準を通知している。
 - ・すべての科目の成績評価・単位認定基準は『文学部履修の手引き』に公表されている。
 - ・GPCA 集計表を通じて、すべての専任教員が成績評価の適切性を確認している。
 - ・学生に対して成績調査の申請機会を保証し、教授会では必要に応じて成績訂正について審議している。
- そのほか、各学科における取り組みは以下のとおりである。

【哲学科】

- ・「基礎ゼミ」や「基礎演習」では、単位認定および成績評価の基準を、担当教員間で協議のうえで決定している。

【日本文学科】

- ・オムニバス授業「日本文芸学概論A・B」（必修科目）の成績評価は、学科会議の審議事項としている。
- ・「大学での国語力」「ゼミナール入門」では、各クラスで成績評価の割合に不均衡が生じないように、担当教員で協議のうえ、成績を決定している。

【英文学科】

- ・「基礎ゼミ」では、複数クラス間で成績評価に不均衡が生じないように、担当教員で協議のうえで成績を決定している。
- ・卒業論文の評価基準をあらかじめ公開している。

【史学科・心理学科】

- ・シラバス以外でも、卒業論文の審査基準を文書化し、あらかじめ公開している。

【地理学科】

- ・卒業論文の評価を全教員で協議のうえ決定している。

【心理学科】

- ・卒業論文の口述試験を Zoom での発表会形式で実施し、その成績を全教員が協議のうえ決定している。

【2021年度に改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

特になし。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・『文学部履修の手引き』

【日本文学科】 学科会議資料、「大学での国語力」「ゼミナール入門」検討会・反省会資料

【史学科】 「史学科卒業論文の提出と評価について」「卒業論文作成心得」（卒業論文ガイダンス配付資料）

【心理学科】 「法政大学人文科学研究科心理学専攻修士論文／文学部心理学科卒業論文評価表」

(<http://www.hosei-shinri.jp/psychology/documents/thesis-evaluation-form.pdf>)

3.5②厳格な成績評価を行うための方策を行っていますか。2021年度1.3②に対応

A： 従来通り効果的に取り組むことができた

※取り組みの概要を記入。

厳格な成績評価を行うため、各科目では試験、レポート、口頭発表等にもとづく評価を実施し、その方法もシラバスを通じて告知されている。担当教員もそれを踏まえ、成績評価を行っている。また、GPCA 集計表を通じて、すべての専任教員が成績評価の適切性を確認できる仕組みをとっている。教授会においても、学部長より全学的な GPCA の傾向が適宜報告されている。

なお、講義科目におけるSの付与は、認定単位のうち20%以内を目途とすることが承認されている。

そのほか、特定の科目の成績評価に対する厳正な方法については、前記1.3①参照。

【2021年度に改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

特になし。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・web シラバス・文学部

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた、B：改善することができなかった。」を意味する。

・2021年度第1、4、8回文学部定例教授会議事録

3.5③学生の就職・進学状況を学部（学科）単位で把握していますか。2021年度1.3③に対応

はい

【データの把握主体・把握方法、データの種類の等】※箇条書きで記入。

- ・2021年度第3回教授会において「文学部生の就職活動とキャリアセンターによる就職支援について」と題した研修会を開催し、文学部学生の就職状況の情報を共有した。
- ・2021年度第5回文学部定例教授会にて、2020年度の進路状況報告を行った。
- ・文学部生の進路実績、および業種別就職先を文学部案内に掲載している。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・2021年度第3回文学部定例教授会 資料19
- ・2021年度第5回文学部定例教授会 資料13
- ・2022年法政大学文学部案内 pp.13-14

3.6 学位授与方針に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。

3.6①成績分布、進級などの状況を学部（学科）単位で把握していますか。2021年度1.4①に対応

はい

【データの把握主体・把握方法、データの種類の等】※箇条書きで記入。

- ・成績分布については、GPCA集計表を各学科により個々の教員が確認できる状態になっている。
- ・進級・留級については、教授会の審議事項としている。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・2021年度第4、8回文学部定例教授会議事録
- ・2021年度第5、10、11回文学部定例教授会議事録
- ・2021年度第5回文学部定例教授会 資料16
- ・2021年度第10回文学部定例教授会 資料3
- ・2021年度第11回文学部定例教授会 資料3

3.6②学修成果の把握に関する方針（アセスメント・ポリシー）に基づき、分野の特性に応じた学習成果を測定するための指標の適切な設定または取り組みが行われていますか。2021年度1.4②に対応

A： 従来通り効果的に取り組むことができた

※取り組みの概要を記入。

文学部および各学科では「大学の学修成果の把握に関する方針（アセスメント・ポリシー）」を定め、公表している。そこでは、アドミッション・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、ディプロマ・ポリシーに照らして、入学段階、初年次教育、専門科目・市ヶ谷リベラルアーツ科目等、ゼミナール、卒業時における学修成果測定のための指標と検証の方法を明示している。

【2021年度に改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

特になし。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・大学の学修成果の把握に関する方針（アセスメント・ポリシー）・文学部
(https://www.hosei.ac.jp/hosei/daigakugaiyo/rinen/hoshin/seika_hoshin/gakubu/)
- ・『文学部履修の手引き』

3.6③学修成果の把握に関する方針（アセスメント・ポリシー）に基づき、具体的な学習成果を把握・評価するための方法を導入または取り組みが行われていますか。2021年度1.4③に対応

A： 従来通り効果的に取り組むことができた

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた、B：改善することができなかった。」を意味する。

※取り組みの概要を記入。取り組み例：アセスメント・テスト、ルーブリックを活用した測定、学修成果の測定を目的とした学生調査、卒業生・就職先への意見聴取、習熟度達成テストや大学評価卒業生アンケートの活用状況等。

文学部および各学科の「大学の学修成果の把握に関する方針（アセスメント・ポリシー）」にもとづき、以下のように学修成果の把握・評価を行っている。即ち、初年次教育では「基礎ゼミ」等での取り組みや成果を通じて、大学での学修に必要なスキルと主体的な学習態度を身につけたか、把握している。専門科目・ILAC科目等では期末試験、レポート、小テスト、リアクションペーパー等を通じて、専門分野の学問内容・研究方法、幅広い知識や教養、グローバルな問題意識を身につけたか、把握している。ゼミナールでは研究発表やレポートを通じて、課題発見・解決力、思考力、調査力、また、それらを説得力をもって発信するための文章力、プレゼンテーション能力、他者と協力し議論しながら多角的に問題をとらえる力や態度を身につけたか、把握している。卒業時には卒業論文、単位修得状況、成績評価等を通じて、ディプロマ・ポリシーに示すような能力・資質を総合的に身につけたか、把握している。なお、文学部では卒業論文が必修であるため、4年間の学修成果は論文本体および口述試験によって、総括的に把握・評価が可能となっている。レポート、口頭発表、卒業論文への取り組み、評価にあたり、ルーブリックの使用が広まりつつある。

なお、上記以外の学科固有の取り組みは以下のとおりである。

【哲学科】

哲学的な議論や主張ができるための正確な文章力の習得を重要な教育上の目標として、3～4年次の演習授業、4年次の卒業論文作成の前提として2年次学生向けに「基礎演習」を実施し、レポート作成を通じた文章力の養成・指導に取り組んでいる。

【地理学科】

教員免許、測量士補、地域調査士等の資格取得者数等の調査を毎年度実施している。

【心理学科】

個々の学生が取り組む卒論研究については、研究計画書を提出し、倫理審査を受けることを義務付けており、この段階で全教員が全学生の研究計画書を読んでいる。倫理審査の目的は研究計画の適切さを評価することにあるが、同時にこの仕組みは、研究対象や研究方法に関する理解度や計画書の作成技術など、個々の学生のそれまでの学修成果を把握するのにも役立っている。

【2021年度に改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

特になし。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・大学の学修成果の把握に関する方針（アセスメント・ポリシー）・文学部
(https://www.hosei.ac.jp/hosei/daigakugaiyo/rinen/hoshin/seika_hoshin/gakubu/)
- ・学習成果を把握（測定）する方法・文学部
(https://www.hosei.ac.jp/application/files/1715/8563/7329/04_.pdf)
- ・web シラバス・文学部

3.6④学習成果を可視化していますか。2021年度1.4④に対応

A： 従来通り効果的に取り組むことができた

※取り組みの概要を記入。取り組み例：専門演習における論文集や報告書の作成、統一テストの実施、学生ポートフォリオ等

各学科の取り組みは以下のとおりである。

【哲学科】

- ・一部の「哲学演習」における卒業論文反省会の実施（卒論面接審査後に4年生が他の4年生及び3年生に向けて自身の卒論内容と執筆上の反省点等を報告）、卒論論集・卒論要旨集の作成。
- ・一部の「哲学演習」では、ゼミ発表と配付資料、ゼミ活動をDVDに収録し、配付。
- ・「国際哲学特講」では毎年の研修成果を学科ホームページ上で公開。

【日本文学科】

- ・優秀卒業論文・卒業制作を学科発行の学術雑誌『日本文学誌要』・文芸雑誌『法政文芸』で公表。
- ・卒業論文の論題一覧を学術雑誌『日本文学誌要』に公表。
- ・「ゼミナールレポート集」「卒業論文集」「創作作品集」を作成し、「ゼミナール」における学修成果を公表。

【英文学科】

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。
 ※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ
 ※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた、B：改善することができなかった。」を意味する。

<ul style="list-style-type: none"> ・年度末発行の学内誌『SMILE』に卒業論文論題一覧を公表、さらに各分野の優秀論文を掲載。 ・学科生の団体 Links において、学生がゼミでの学習状況等を発表。 ・学科 SA 報告会において海外留学の成果を発表。 <p>【史学科】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学科内学会の雑誌『法政史学』に卒業論文の題名一覧を公表。 ・全国学会の主催する優秀卒業論文発表会への推薦（具体的には地方史研究協議会が主催する「日本史関係卒業論文発表会」）。 <p>【地理学科】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・卒業論文面接試問（発表会）でのプレゼンテーションに加え、「卒業論文要旨集」（A4 各 2 ページ）を作成している。また、在学生も発表会に参加し、法政大学地理学会の定期刊行物『法政地理』に卒業論文の題目一覧を公表。 ・全国地理学専攻学生卒業論文大会（日本地理教育学会主催）へのエントリー。 ・『法政地理』への優秀卒業論文の投稿。 <p>【心理学科】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・卒業論文の発表会でのプレゼンテーションに加え、研究成果を A4 判 1 ページの要旨としてまとめて配付するほか、法政大学心理学会の定期刊行物「法政心理学会年報」で公表。
<p>【2021 年度に改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価で S を選択した場合に具体的な内容を記入。</p> <p>特になし。</p>
<p>【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。</p>
<p>【哲学科】 哲学科サイト (https://philos.ws.hosei.ac.jp/)</p> <p>【日本文学科】『日本文学誌要』『法政文芸』</p> <p>【英文学科】『SMILE』『文学部英文学科 Study Abroad Program』（学生への配付パンフレット）</p> <p>【史学科】『法政史学』、地方史研究協議会「日本史関係卒業論文発表会」(http://chihoshi.jp/?p=2745)</p> <p>【地理学科】『法政地理』、法政大学地理学会サイト (http://www.chiri.info/index.html)</p> <p>日本地理教育学会サイト (http://www.geoedu.jp/)</p> <p>【心理学科】「修士論文・卒業論文要旨集』『法政心理学会年報』</p>

3.7 教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。

3.7①学習成果を定期的に検証し、その結果をもとに教育課程およびその内容、方法の改善・向上に向けた取り組みを行っていますか。2021 年度 1.5①に対応

<p>A： 従来通り効果的に取り組むことができた</p>
<p>※検証体制及び方法、改善・向上に向けた取り組みの概要を記入。</p> <p>学期末に「学生による授業改善アンケート」を実施し、各教員がその結果を授業内容に活かすことで、授業内容とシラバスの整合性を、学生の学びの立場に立ってチェックする体制をとっている。また、毎年実施される「卒業生アンケート」の集計結果をすべての専任教員が教授会において把握する方策をとっており、その結果を教育課程、内容、方法の改善に役立てている。</p> <p>また、文学部質保証委員会においては学生アンケートについての意見交換が行われ、2021 年度第 11 回文学部定例教授会にて報告された。</p> <p>また、2021 年度は第 5 回文学部定例教授会にて卒業生アンケートの集計結果が報告された。加えて、「学生モニター制度」を実施し、学生の意見・要望も聴きとることにより、教育課程、内容の改善に生かす方策もとっている。2021 年度の学生モニターからのヒアリング結果は、第 9 回文学部定例教授会にて報告された。</p> <p>各学科では学科会議や FD ミーティングにおいて、学修成果の検証とそれにもとづく教育課程・内容・方法の改善について審議している。</p>
<p>【2021 年度に改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価で S を選択した場合に具体的な内容を記入。</p> <p>特になし。</p>
<p>【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。</p>
<p>2021 年度第 4 回文学部定例教授会 資料 9</p>

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。
 ※注 2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ
 ※注 3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた、B：改善することができなかった。」を意味する。

2021 年度第 5 回文学部定例教授会 資料 11、14
2021 年度第 9 回文学部定例教授会 資料 20
2021 年度第 11 回文学部定例教授会 資料 6

3.7②学生による授業改善アンケート結果を組織的に利用していますか。2021 年度 1.5②に対応

A : 従来通り効果的に取り組むことができた
【利用方法】※箇条書きで記入。 <ul style="list-style-type: none"> ・学生による授業改善アンケートの結果を各教員が生かし、そこから気づいたこと、授業改善に役立てたことをシラバスのうち、「学生の意見等からの気づき」の項目で公表している。 ・教学改革委員会および各学科の学科会議で、授業改善のための検討資料として利用することがある。 ・必要時には、各学科が執行部より学科ごとの「自由記述欄」のデータの提供を受け、現状把握にあたることもある。 ・ただし、現行のアンケートは評価・回答方法のあり方、回答率の低さなどから、教育課程や教育内容・方法の組織的改善のためには利用しにくいという声もある。
【2021 年度に改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価で S を選択した場合に具体的な内容を記入。 特になし。
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・web シラバス・文学部

(2) 長所・特色

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、取り組み内容から「長所」や「特色」として特記すべき事項を記入。なお、現在「長所」や「特色」として特記すべき事項がなかった場合は、今後さらに「長所」や「特色」とする取り組み等を向上させていくために課題と考えられる点やその対応計画を記入していただく等できる限り記入をしてください。

内容
<ul style="list-style-type: none"> ・学部および各学科の PDCA サイクルが円滑に機能し、カリキュラムの点検を不断に行い、教育改善に努めている。 ・教育課程の編成・実施方針にもとづき、「ゼミナール」「演習」「卒業論文」を必修とするほか、これらに対応する基礎力を養成するための「基礎ゼミ」等を開講している。 ・学内で実施されている各種サティフィケートや千代田区キャンパスコンソーシアムに参加することにより、幅広い見識を養う学修の機会を提供している。 ・成績不振学生に対する面談を実施し、学習状況が芳しくない学生個々の抱える問題の把握に努めている。

(3) 課題・問題点

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、改善を要すると判断される「課題・問題点」として特記すべき事項を記入。なお、「課題・問題点」に対する改善計画がある場合には、その具体的な計画（既に実施している場合にはその進捗状況も含めて）をあわせて記入してください。「課題・問題点」を認識し改善につなげるためにできる限り記入をしてください。

内容
成績不振学生には各学科で連絡し、面談を行っているが、成績不振に陥っている原因は様々であり、中には精神的な病を抱え、療養中の学生もいる。そのような学生に対しては異なる対応を考える必要があるのではないかと意見が様々な学科から挙がっている。

【教育課程・学習成果の評価】

<p><①方針の設定に関すること (3.1~3.2) ></p> <p>文学部では、修得すべき学習成果や諸要件が明示された学位授与方針を設定し、その水準に達した学生への「学士(文学)」の授与が行われている。教育課程の編成・実施方針は、学生に期待する学習成果の達成を可能としている。</p> <p>教育目標、学位授与方針、教育課程の編成・実施方針は『文学部履修の手引き』『web シラバス (文学部)』、大学 HP など適切に周知・公表されており、それら方針等の適切性と連関性の検証を行うプロセスは明確化されており、検証時期は固定化されていないものの、2021 年度は 4 月から 5 月にかけて検証を行い、最終的には教授会の承認を得ていることから適切に実施されている。</p>
--

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。
 ※注 2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ
 ※注 3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S: さらに改善することができた、A: 従来通り効果的に取り組むことができた、B: 改善することができなかった。」を意味する。

<②教育課程・教育内容に関すること (3.3) >

文学部では、学生の能力育成のために専門分野の学問内容を深く、網羅的に学修することができるカリキュラムを構築し、更にはプレゼンテーション、ディスカッション、課題発見・解決能力を高める教育に力を入れている。卒業論文を必修科目と位置付けるほか、学部・学科横断的な科目の取り込みに加え、4学科では大学院科目の履修も認めることで、高度な学習機会を設けていることも評価できる。

カリキュラムの順次性・体系性については1年次には基礎ゼミや概論科目を、2年次以降はより専門性の高い科目を開講し、調査・研究・発表を主体とした教育を実施、4年次には卒業論文を必修とすることで、論理的な思考力・表現力が養成されるよう配慮している。

教養教育等については総合的な見識や判断力を養成することを重視し、幅広い領域の教養が身につくよう配慮されている。特に、2022年度には文学部のすべての学科が千代田区コンソーシアム単位互換に参加することになり、参加大学が提供する幅広い科目の受講が可能となる点は高く評価できる。

文学部の初年次教育への積極的な取り組みは評価できる。高大接続に向けては、法政大学高等学校3年生による一部専門科目の聴講が認めているものの、未だ実績がないということであり、状況の分析や対応策を引き続き検討することが望ましい。

国際性の涵養については、2020年度以降、COVID-19の影響による海外への渡航が制限されたが、2022年度以降、感染症の影響が続いた場合でも継続的に制度を維持し、国際性を涵養するための学びを維持すべく、オンラインを取り入れた授業方式や留学方式を拡充した点は大いに評価できる。

キャリア教育については、2021年度に「文学部生のキャリア形成」をオンライン科目とすることを決定したが、外部講師を遠隔地から招聘することが可能になり、講師選定の幅が広がることで、より適切な教育内容が提供できることは大いに評価できる。

<③教育方法に関すること (3.4) >

文学部における履修指導は、学科ごとに適切に行われており、特に2021年度は前年度に引き続きラーニングサポーター制度を活用した上級生による相談会やガイダンスといった形で履修指導や学習指導が実施された点は高く評価できる。

学習時間（予習・復習）を確保するための方策については、履修登録単位数の上限を、再履修単位を含めて49単位と定め、計画的な単位履修の指導を行っているほか、シラバスにも「授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）」を記載している。

授業形態に関して、文学部では「基礎ゼミ」「ゼミナール」「卒業論文」のみならず、各種授業においても、学生がこのような学習活動を実践できるアクティブ・ラーニングの仕組みを積極的に導入することを心がけている。

大教室における講義科目でも、リアクションペーパーや学習支援システム等を活用した双方向型の授業形態を積極的に導入し、アクティブ・ラーニングが実現できるように努めている。各学科とも「基礎ゼミ」等、「ゼミナール」「演習」においては、少人数教育を徹底するため、履修者の選抜や科目間での履修者数の調整等を行っている。また、ILAC科目の英語においては1授業あたり24名を履修者の上限とし、諸外国語においても1授業あたりの履修者の上限を設けている。

シラバスチェックは、教授会にて各学科の担当者に対して次年度分のチェックを依頼しているが、英文学科と心理学科では学科所属の専任教員、地理学科では、地域調査士、GIS学術士の資格科目に関しては、必須のキーワードがシラバスに掲載されているかを担当教員がチェックするという対応を取っており、授業改善アンケート、相互授業参観、リアクションペーパーを通じて授業がシラバスに沿って行われていることを確認している点は評価できる。

<④学習成果・教育改善に関すること (3.5~3.7) >

文学部では、すべての専任教員・兼任教員に成績評価・単位認定基準を通知しているほか、すべての科目の成績評価・単位認定基準を「文学部履修の手引き」に公表し、成績調査の申請機会を学生に保証し、成績訂正については必要に応じて教授会で審議していることから、成績評価と単位認定は適切に行われていると評価できる。

また、厳格な成績評価を行うための方策として、シラバスを通じて告知した方法で評価を実施したうえで、成績評価を行い、成績評価の適切性については「GPCA集計表」を通じて確認できる仕組みを取っているほか、S付与の割合を定めた全学的な申し合わせが遵守されている。

学生の就職・進学状況については、「教授会」、「学科会議」、「キャリアセンター」の連携により、また成績分布は学部別・学科別のGPCA集計表の配布により執行部や学科単位で確認され、進級や留級状況は学科主任会議や教授会の承認事項とすることで把握されている。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた、B：改善することができなかった。」を意味する。

文学部および各学科では「大学の学修成果の把握に関する方針（アセスメント・ポリシー）」を定め、公表している。そこでは、アドミッション・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、ディプロマ・ポリシーに照らして、入学段階、初年次教育、専門科目・市ヶ谷リベラルアーツ科目等、ゼミナール、卒業時における学修成果測定のための指標と検証の方法を明示している。

学習成果の検証と、検証結果に基づいた教育・研究活動の改善に関しては教員個人に負うところが大きい。学期末に「学生による授業改善アンケート」を実施し、各教員がその結果を授業内容に活かすことで、授業内容とシラバスの整合性を、学生の学びの立場に立ってチェックする体制をとっている。また、毎年実施される「卒業生アンケート」の集計結果をすべての専任教員が教授会において把握する方策をとっており、その結果を教育課程、内容、方法の改善に役立てている。

なお、COVID-19の影響により、2020年度の授業改善アンケート結果、および文学部質保証委員会報告をふまえ、2021年度には各教員がより効果的なオンライン・ハイフレックス授業の方法を模索し、改善を行った点は評価できる。

4 学生の受け入れ

(1) 点検・評価項目における現状

4.1 学生の受け入れ方針を定め、公表しているか。

4.1①求める学生像や修得しておくべき知識等の内容・水準等を明らかにした学生の受け入れ方針を設定していますか。2018

年度 4.1①に対応

はい

4.2 学生の受け入れ方針に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。

4.2①学生の受け入れ方針に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や体制をどのように適切に整備していますか。また、入学者選抜をどのように公正に実施していますか。新規

※取り組み概要を記入。

特別入試では、複数の教員による書類審査、および面接を行っており、公正な入試の実施に努めている。さらに毎年、各学科にて様々な入試経路を経て入学した学生の成績を確認し、それぞれの入試の定員枠の見直しを行っている。また、併せて特別入試での出願資格の見直しも毎年行っている。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

2021年度第1回入試小委員会議事録

2021年度第2回入試小委員会議事録

2021年度第3回入試小委員会議事録

2021年度第4回入試小委員会議事録

4.3 適切な定員を設定して学生の受け入れを行うとともに、在籍学生数を収容定員に基づき適正に管理しているか。

4.3①定員の超過・未充足に対し適切に対応していますか。2018年度 4.2①に対応

はい

※入学定員・収容定員の充足状況をどのように捉えているかを記入。

各種入試における合格者の決定は、執行部（入試委員）と入学センターおよび担当理事が協議し、慎重に行っている。また、特別入試の合格者の決定は、学科とも協議したうえで行っている。定員の超過・未充足が生じないよう努めているが、2021年度入試では定員の厳格化とCOVID-19蔓延による受験動向の変化の影響を受け、学科によって過小・超過が生じることとなった。入学定員の管理については、今後も引きつづき慎重に行っていく必要があるとの認識をもっている。なお、入学定員・収容定員の充足状況は、教授会で報告され（2021年度は第1回文学部定例教授会）、すべての専任教員に把握されている。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・2021年度第1回文学部定例教授会議事録、同配付資料「2021年度入学者手続き状況（最終）」「入学定員超過率（2018～2021年度）」

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた、B：改善することができなかった。」を意味する。

4.4 学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。

4.4①学生募集および入学者選抜の結果について定期的に検証を行い、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っていますか。2018年度4.3①に対応

S: さらに改善することができた
※検証体制及び検証方法、改善・向上に向けた取り組みの概要を記入。
学生募集および入学者選抜の結果については、毎年、教授会、入試小委員会（各学科より1名選出される委員と教授会主任によって構成）、各学科の学科会議で検証される。その際、入学者の入試経路別 GPA 平均値等のデータも検討資料に加え、各種入試の定員、選抜方法の改善、指定校推薦入試の依頼校の見直し等を必要に応じて行っている。
【2021年度に改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。
2023年度外国人留学生入試（前期日程・面接型）より、現在の出願条件である「日本留学試験 570点以上」を「550点以上」に変更した。
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。
2022年度第10回入試委員会「【資料1】各学部からの次年度入試制度報告」（留学生入試の変更について記載）

(2) 長所・特色

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、取り組み内容から「長所」や「特色」として特記すべき事項を記入。なお、現在「長所」や「特色」として特記すべき事項がなかった場合は、今後さらに「長所」や「特色」とする取り組み等を向上させていくために課題と考えられる点やその対応計画を記入していただく等できる限り記入をしてください。

内容
入学センターと連携し、入試小委員会を中心として入試制度を点検し改善する体制を維持している。2023年度入試から留学生入試（前期日程・面接型）の出願条件を変更し、変化しつつある留学生の動向にも対応すべく、不断の改革を推進している。

(3) 課題・問題点

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、改善を要すると判断される「課題・問題点」として特記すべき事項を記入。なお、「課題・問題点」に対する改善計画がある場合には、その具体的な計画（既に実施している場合にはその進捗状況も含めて）をあわせて記入してください。「課題・問題点」を認識し改善につなげるためにできる限り記入をしてください。

内容
特になし。

【学生の受け入れの評価】

<p>文学部は、求める学生像や基礎知識の修得、関心・意欲の在処を明示した学生の受け入れ方針を学部としても学科としても設定している。</p> <p>各種入試における合格者の決定は、執行部（入試委員）と入学センターおよび担当理事が協議し、慎重に行っている。また、特別入試の合格者の決定は、学科とも協議したうえで行っている。定員の超過・未充足が生じないよう努めているが、2021年度入試では定員の厳格化と COVID-19 蔓延による受験動向の変化の影響を受け、学科によって過小・超過が生じることとなった。入学定員の管理については、今後も引きつづき慎重に行ってゆくことを期待したい。</p> <p>学生募集および入学者選抜の結果については、毎年、教授会、入試小委員会、各学科の学科会議で検証されている。また入学センターと連携し、入試小委員会を中心として入試制度を点検し改善する体制を維持している。</p> <p>2023年度入試から留学生入試（前期日程・面接型）の出願条件を変更し、変化しつつある留学生の動向にも対応しており、今後も引き続き不断の改革に期待したい。</p>

5 教員・教員組織

(1) 点検・評価項目における現状

5.1 大学の理念・目的に基づき、大学として求める教員像や各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。

5.1①採用・昇格の基準等において、法令に定める教員の資格要件等を踏まえて、教員に求める能力・資質等を明らかにして

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S: さらに改善することができた、A: 従来通り効果的に取り組むことができた、B: 改善することができなかった。」を意味する。

いますか。2018年度5.1①に対応

はい

【根拠資料】※教員に求める能力・資質等を明らかにしている規程・内規等の名称を記入。

・「文学部教授会規程」「文学部教授会規程内規」「文学部人事委員会細則」および各学科「人事に関する内規」

5.1②組織的な教育を実施する上において必要な役割分担、責任の所在をどのように明示していますか。2018年度5.1②に対応

【学部執行部の構成、学部内の基幹委員会の名称・役割、責任体制】※箇条書きで記入。

- ・学部執行部の構成：学部長1名（教授会構成員の投票による選出）、教授会主任・副主任各1名（学部長の委嘱、教授会の承認）により構成される。
- ・学部執行部の役割：学部長は教授会を代表し、文学部教授会規程第3条に定められた事項の審議を行うべく、教授会を招集する。教授会主任は学部長を補佐し、学部長に支障のある場合には、その職務を代行する。教授会副主任の職務等は、主任に準ずる。
- ・各学科：学科の運営を行うため、学科主任を置く。各学科では所属する専任教員を下記基幹委員会委員をはじめとする学内各種委員に選出するほか、学科内の教育・研究上必要な業務、全学の入試業務等の担当者を選出し、全学・学部・学科の運営にあたることとしている。
- ・基幹委員会名称：人事委員会、紀要委員会、留学規定委員会、資料室委員会、教学改革委員会、入試小委員会、広報小委員会、文学部IT委員会、文学部質保証委員会、文学部共通科目運営委員会ほか。

【明示方法】※箇条書きで記入。

・「文学部教授会規程」「文学部教授会規程内規」において明示している。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・「文学部教授会規程」「文学部教授会規程内規」「文学部各種委員会一覧」

5.2 教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。

5.2①学部（学科）のカリキュラムにふさわしい教員組織を備えていますか。2018年度5.2①に対応

はい

※教員像及び教員組織の編制方針、カリキュラムとの整合性、国際性、男女比等の観点から教員組織の概要を記入。

各学科とも専門分野等のバランスに留意し、カリキュラムに対応した専任教員の体制を組織している。また、必要に応じて兼任・兼担教員も配置し、より網羅的できめ細かな教育活動が行える体制を確立している。

なお、各学科におけるカリキュラムと専任教員体制の対応は以下のとおりである。

【哲学科】

幅広い哲学・思想分野をカバーするため、日本思想1名、古代ギリシャ哲学1名、英米系哲学1名、フランス系哲学・思想2名、ドイツ系哲学・思想4名、数理哲学1名、法哲学1名、比較文化1名の体制をとっている。

【日本文学科】

専任教員全16名のうち、文学コース11名、言語コース3名、文芸コース2名という配分となっている。学生の各コースへの所属を示すゼミナールの数では文学コース11、言語コース5、文芸コース5となり、カリキュラムの体系性にふさわしい教員組織である。

【英文学科】

専任教員13名のうち、専門科目を中心に担当する教員が9名、ILAC科目を中心に担当する教員が5名である。また分野的には、英米文学6名、英語学・言語学4名、英語教育学1名、ドイツ文学・比較文学2名という配分である。

【史学科】

日本史分野では、5名の専任教員（考古学・古代史・中世史・近世史・近現代史）を配置している。東洋史分野では、従来からの2名の教員（文献史料・物質資料各1名）と2021年度採用の任期付教員1名（中国史）の計3名の専任教員を配置している。西洋史分野では、3名（前近代史2名・近現代史1名）の専任教員を配置している。

【地理学科】

総合科学として幅が広い地理学の領域をカバーするべく、人文地理学・自然地理学それぞれにおいて専門分野のバランスに留意した教員組織としている。多くの専門科目を他学部公開科目とすること、教員が教養科目（ILAC科目・総合科

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた、B：改善することができなかった。」を意味する。

目)を分担することで、他学部・他学科の学生と教員が接触する機会を多く設定し、教員の価値観・視野が狭窄なものにならないよう工夫している。

【心理学科】

心理学科のカリキュラムは、「認知」と「発達」という心理学科独自の二領域を柱に据えた編成に特徴がある。このカリキュラムの運用を維持するため、「認知」「発達」の二領域を広くカバーできる教員組織の整備が実現されている。具体的には、知覚、生理、発達、教育、学習、行動、犯罪、言語、スポーツ、健康といった分野を網羅している。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・文学部 HP 教員紹介

(<https://www.hosei.ac.jp/bungaku/kyoin/?auth=9abbb458a78210eb174f4bdd385bcf54>)

5.2②教員組織の編制において大学院教育との連携を考慮していますか。2018年度5.2②に対応

はい

※教員組織の編制において大学院教育との連携にあたりどのようなことが考慮されているか概要を記入。

哲学・日本文学・英文学・史学・地理学・心理学から成る文学部の6学科体制は、大学院人文科学研究科の6専攻体制に対応し、学科と専攻の教育上の連携は十分図られている。加えて、哲学・日本文学・英文学・史学・地理学の5専攻は国際日本学インスティテュートを組織し、20名の文学部専任教員が専任教員として同インスティテュートに所属している。その結果、文学部各学科の教員の約9割は、人文科学研究科の各専攻および国際日本学インスティテュートに所属して、学部・大学院の教育にあっている。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・『大学院要項』

5.2③特定の範囲の年齢に著しく偏らないように配慮していますか。2018年度5.2③に対応

はい

【特記事項】※ない場合は「特になし」と記入。

学部全体で見えた場合、専任教員の年齢構成は適切である。一部の学科において教員の年齢層に偏りが認められるが、年々、年齢層の偏りは解消しつつある。各学科とも今後の新規採用人事において、年齢構成に配慮した採用を心がけるとの意識をもっている。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

法政大学文学部カルテ

(<https://hosei-ir.hosei.ac.jp/ir/karte/gakubu/view.html?dept1=文学部>)

5.3 教員の募集、採用、昇任等を適切に行っているか。

5.3①各種規程は整備されていますか。2018年度5.3①に対応

はい

【根拠資料】※教員の募集・任免・昇格に関する規程・内規等の名称を簡条書きで記入。

- ・「文学部教授会規程」「文学部教授会規程内規」「文学部人事委員会細則」および各学科「人事に関する内規」
- ・大学の定める「教員の定年に関する規程」「法政大学名誉教授規程」「市ヶ谷リベラルアーツセンター運営委員会規程」「助教規程」「学部任期付教員規程」等

5.3②規程の運用は適切に行われていますか。2018年度5.3②に対応

はい

【募集・任免・昇格のプロセス】※簡条書きで記入。「上記根拠資料の通り」と記載し、内規等（非公開）を添付することも可。

・上記根拠資料のとおり。

5.4 教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ 「S・A・B」は前年度から「S:さらに改善することができた、A:従来通り効果的に取り組むことができた、B:改善することができなかった。」を意味する。

5.4①学部（学科）内のFD活動は適切に行なわれていますか。2021年度2.1①に対応

A： 従来通り効果的に取り組むことができた
【FD活動を行うための体制】※箇条書きで記入。 ・「専任教員による授業相互参観」を実施している。 ・教授会および各学科においてFD研修会・ミーティングを実施している。
【2021年度のFD活動の実績（開催日、場所、テーマ、内容（概要）、参加人数等）】※箇条書きで記入。 【教授会における研修会】 ・2021年6月16日（第3回文学部定例教授会）、教員向けキャリアセンター研修、講師：森田愛弓（法政大学キャリアセンター）、61名 【専任教員による授業相互参観】 ・学部全体で7科目、延べ49人の参観を実施した（2020年度は10科目、61人）。昨年度はCOVID-19の影響で授業がオンライン化されたことにより、多くの教員による相互参観が見られた。今年度も昨年度に引き続き、COVID-19以前に比べ多くの教員による授業相互参観が見られた（2019年度は9科目、18名）。 【FDミーティング等】 ・学科ごとのFDミーティングは、哲学科7回、日本文学科4回、英文学科9回、史学科3回、地理学科21回、心理学科はメーリングリストにて、実施した。各学科とも、学生に関する情報共有のほか、オンラインによる授業方法や学生指導に関する工夫や課題について検討・意見交換を積極的に行い、情報共有と課題の把握、対応方法の検討が進められた。オンラインという新しい授業形態における各種ツールの活用やそれに基づく授業手法について、個々の教員のみならず、学科など共同での取り組みや工夫が促された。
【2021年度に改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。 ・教授会において教員研修会を1回開催したほか、学科ごとのミーティングも活発に行った。また、質保証委員会にて、オンライン・ハイフレックス授業についての意見交換と情報共有を行い、教授会にて報告した。
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・2021年度第3回文学部定例教授会議事録 ・2021年度教員による授業相互参観実施状況報告書（2021年度第10回教学改革委員会 資料7） ・2021年度文学部質保証委員会活動報告（2021年度第11回文学部定例教授会 資料6）

5.4②研究活動や社会貢献等の諸活動の活性化や資質向上を図るための方策を講じていますか。2021年度2.1②に対応

A： 従来通り効果的に取り組むことができた
※取り組みの概要を記入。 全学で定められている「個人研究費」等の研究費の支給・執行・精算を学部事務課文学部担当で管理し、教員の研究活動を支援している。学会等を本学で開催する場合には、教授会でも開催を承認し、大学の補助を得られるよう支援している。学内の付置研究所に兼担所員や運営委員を選出し、当該教員の研究活動を支援するほか、大学全体の研究力向上にも努めている。 『法政大学文学部紀要』を年2回刊行し、教員の研究成果の発表の場を設けている。また、各学科でも学内学会を組織し、研究発表会の開催、研究誌の刊行を行っている。
【2021年度に改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。 特になし。
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・『法政大学文学部紀要』『法政哲学』『日本文学誌要』『英文學誌』『法政史学』『法政地理』『法政心理学会年報』

(2) 長所・特色

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、取り組み内容から「長所」や「特色」として特記すべき事項を記入。なお、現在「長所」や「特色」として特記すべき事項がなかった場合は、今後さらに「長所」や「特色」とする取り組み等を向上させていくために課題と考えられる点やその対応計画を記入していただく等できる限り記入をしてください。

内容

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。
 ※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ
 ※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた、B：改善することができなかった。」を意味する。

・授業のオンライン化に伴って、授業相互参観の方法と内容の幅が広がり、教員間での情報共有が進んだ。
 ・FD ミーティング等を通じて、オンラインでの授業や学生指導の方法・課題に関する学科での検討が活発に行われ、オンライン化に伴う新しい授業形態・学生指導方法に関する教員間の理解と情報共有が促進された。

(3) 課題・問題点

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、改善を要すると判断される「課題・問題点」として特記すべき事項を記入。なお、「課題・問題点」に対する改善計画がある場合には、その具体的な計画（既に行っている場合にはその進捗状況も含めて）をあわせて記入してください。「課題・問題点」を認識し改善につなげるためにできる限り記入をしてください。

内容
特になし。

【教員・教員組織の評価】

文学部では、採用・昇格の基準等については、「文学部教授会規程」、「文学部教授会規程内規」、「文学部人事委員会細則」及び各学科の「人事に関する内規」に求める能力・資質等を明示している。教授会執行部の各役職（学部長、教授会主任・副主任各1名）や、各基幹委員会の設置等による役割分担や責任の所在は明らかである。

教員組織の編成については、各学科とも専門分野等のバランスに留意し、カリキュラムに対応した専任教員の体制となっており、必要に応じ兼任・兼任教員を配置するなど、網羅的かつ丁寧な教育活動が展開されている。

大学院教育との連携を考慮した教員組織の編成については、哲学・日本文学・英文学・史学・地理学・心理学から成る文学部の6学科体制は、大学院人文科学研究科の6専攻体制に対応し、学科と専攻の教育上の連携は十分図られている。

学部全体で見た場合、専任教員の年齢構成は適切である。一部の学科において教員の年齢層に偏りが認められるが、年々、年齢層の偏りは解消しつつある。

教員の募集・任免・昇格に関わる各種規程や内規は整備され、その運用は適切である。学部（学科）内のFD活動は、FD委員会を設置せず執行部と教学改革委員会が連携する体制が取られている。教授会における研修会の開催のほか、専任教員による授業相互参観も学部全体で7科目、延べ49人の参観を実施している。また2021年度はCOVID-19の影響で授業がオンライン化されたことにより、多くの教員による相互参観が見られた。学科ごとのFDミーティングは、哲学科7回、日本文学科4回、英文学科9回、史学科3回、地理学科21回、心理学科はメーリングリストにて、実施された。質保証委員会にて、オンライン・ハイフレックス授業についての意見交換と情報共有を行っている点も評価できる。

6 学生支援

(1) 点検・評価項目における現状

6.1 学生支援に関する大学としての方針に基づき、学生支援の体制は整備されているか。また、学生支援は適切に行われているか。

6.1①卒業・卒業保留・留年者及び休・退学者の状況を学部（学科）単位で把握していますか。2018年度6.1①に対応

はい
【データの把握主体・把握方法・データの種類の種類等】※箇条書きで記入。
・卒業・卒業保留・留年者の把握は、2月の学科会議および教授会で実施されている（秋卒業については9月の教授会で実施）。
・休・退学などの学籍異動の把握は、毎月の学科会議・教授会で実施されている。
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。
・2021年第1回～第11回文学部定例教授会議事録

6.1②学部（学科）として学生の修学支援をどのように行っていますか。2018年度6.1②に対応

S： さらに改善することができた
※修学支援の取り組みの概要を記入（取り組み例：クラス担任、オフィスアワー、学生の能力に応じた補習・補充教育、アカデミックアドバイザーなど）。
文学部ではクラス担任制は敷いていないが、「基礎ゼミ」等、「ゼミナール」「演習」、卒業論文の各担当教員が担任に準じる職務を果たし、学生の修学支援を行っている。各学科の学科主任は学生の窓口としての機能を果たし、学生の要望・

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。
 ※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ
 ※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた、B：改善することができなかった。」を意味する。

<p>相談に適切に対応している。また、すべての専任教員はオフィスアワーを設定し、対応する時間・場所を web シラバスで公開している。なお、各学科における新入生を対象とした個人・グループ面談、懇談会等の実施を通じた学修支援の方策は 3.4①に記した。また、上記以外の学科固有の取り組みは以下のとおりである。</p> <p>【哲学科】</p> <p>2015 年度に哲学科所属の教員の一人が、自らの資産を元に経済的原因での学修困難者を対象にした奨学金制度を発足させた。</p>
<p>【2021 年度に改善された事項および新規取り組み事項等】 ※自己評価で S を選択した場合に具体的な内容を記入。</p>
<p>・学生モニター制度を利用して、コロナ禍の下での学修状況に関する調査を行った。第 9 回文学部定例教授会にて結果を共有し、調査結果に基づき今後の対応を検討した。</p>
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p>
<p>・web シラバス・文学部</p> <p>・2021 年度第 9 回文学部定例教授会議事録、同配付資料 11 「2021 年度文学部学生モニター「モニタリング内容と今後の対応案」」</p>
<p>【哲学科】</p> <p>(http://www.hosei.ac.jp/documents/campuslife/shogaku/2015/makino_150501_01.pdf)</p>

6.1③成績が不振な学生に対し適切に対応していますか。2018 年度 6.1③に対応

<p>A：従来通り効果的に取り組むことができた</p>
<p>【成績不振学生への対応体制及び対応内容】 ※箇条書きで記入。</p> <p>・成績不振学生の定義を明確化し、執行部が各学科主任へ成績不振学生の情報を提供し、対応方策の検討を教学改革委員会で行っている。</p> <p>・実際の成績不振学生への対応は、各学科主任の主導により、学科ごとに行っている。</p> <p>・対応内容としては、「基礎ゼミ」等、「ゼミナール」「演習」担当教員もしくは学科主任による当該学生との面談、学科会議における結果の報告、等である。</p> <p>・執行部および各学科では必要に応じて、学生相談室と連携をとりながら、成績不振学生への対応を行うこともある。</p> <p>・精神的な病により闘病中であることが把握できている学生については別途、適切な対応を考える必要があるとの意見が各学科より出され、対応を引き続き検討することが確認された。</p> <p>そのほか、上記以外の学科固有の取り組みは以下のとおりである。</p> <p>【英文学科】</p> <p>・「新入生オリエンテーション」「在学生ガイダンス」において英文学科作成文書「成績不振学生について」を配付し、成績不振の場合には、保証人に通知のうえ、面談を行う旨の説明を行なっている。</p> <p>【史学科】</p> <p>・1 年生については、12 月に判明する 2 年次以降の所属ゼミ希望調査用紙の未提出者について、履修状況・単位修得状況と成績を確認し、学科主任が本人や保証人に連絡して原因を調査し、相談に応じている。</p> <p>【心理学科】</p> <p>・新入生に対しては、オリエンテーションで少人数のグループに分け、専任教員に割り振って、教員も含めて学生同士が交流できる機会を設けている。また、オリエンテーションや入学式の直後にピアサポーター主催の歓迎会や履修講習会を開催し、大学生活での対人関係や学習システムの違いによるドロップアウトを予防している。</p> <p>・SSI コースの学生は履修の仕方に他の学生とは異なる点があることから、学科所属の SSI 運営委員が早期に面談して丁寧に対応している。</p>
<p>【2021 年度に改善された事項および新規取り組み事項等】 ※自己評価で S を選択した場合に具体的な内容を記入。</p>
<p>特になし。</p>
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。</p>
<p>・2021 年度第 2、5、6 回教学改革委員会議事録</p> <p>・2021 年度第 10 回文学部定例教授会議事録</p>
<p>【英文学科】「成績不振学生について」（新入生オリエンテーション・在学生ガイダンス配付資料）</p>

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。
 ※注 2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ
 ※注 3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた、B：改善することができなかった。」を意味する。

6.1④学部（学科）として外国人留学生の修学支援について適切に対応していますか。2018年度6.1④に対応

A： 従来通り効果的に取り組むことができた
※外国人留学生の修学支援に関する取り組みの概要を記入。
外国人留学生の修学支援は、入学時の個人・グループ面談を通じて行うほか、「基礎ゼミ」等および「ゼミナール」「演習」の担当教員によって行われている。また、来日できなかった外国人留学生に対しては、授業のオンライン・ハイフレックスでの授業配信を行い、対応した。 なお、上記以外の学科固有の取り組みは以下のとおりである。
【日本文学科】 学科内に留学生サポート小委員会を設置し、必要に応じて面談等を行っている。
【史学科】 中国・韓国からの留学生が多いため、東洋史専攻の教員が対応することが多い。
【地理学科】 18年度から留学生と日本人学生とのペアリングによる相互チューターを試験的に行うことにした。
【2021年度に改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。
特になし。
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。
特になし。

6.1⑤学部（学科）として学生の生活相談に組織的に対応していますか。2018年度6.1⑤に対応

A： 従来通り効果的に取り組むことができた
※学生の生活相談に関する取り組みの概要を記入。
「基礎ゼミ」等、「ゼミナール」「演習」、卒業論文の各担当教員と学科主任が、学生の生活相談を受け付け、必要な助言を与えるほか、学内の関連部局と連携して課題の解決に当たっている。各学科では必要に応じて学科会議で課題の共有を図り、解決に向けて協力している。また、障がい、LGBTQIAなどに関わる課題については、執行部も関与し、学内部局との調整を図り、対応を行っている。 なお、専任教員はオフィスアワー等を活用して学生への個別相談を行っている。また、各学科が実施する新入生面談については3.4①参照。
【2021年度に改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。
特になし。
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。
特になし。

(2) 長所・特色

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、取り組み内容から「長所」や「特色」として特記すべき事項を記入。なお、現在「長所」や「特色」として特記すべき事項がなかった場合は、今後さらに「長所」や「特色」とする取り組み等を向上させていくために課題と考えられる点やその対応計画を記入していただく等できる限り記入をしてください。

内容
特になし。

(3) 課題・問題点

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、改善を要すると判断される「課題・問題点」として特記すべき事項を記入。なお、「課題・問題点」に対する改善計画がある場合には、その具体的な計画（既に行っている場合にはその進捗状況も含めて）をあわせて記入してください。「課題・問題点」を認識し改善につなげるためにできる限り記入をしてください。

内容
・外国人留学生への学修支援を充実させ、継続して行う必要がある。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた、B：改善することができなかった。」を意味する。

【学生支援の評価】

文学部では、卒業・卒業保留・留年者・休学者・退学者に関して学科会議と教授会で適切に把握している。

修学支援に関しては、基礎ゼミから卒業論文に至る複数科目の担当教員、あるいは学科主任が大きな役割を果たし、オフィスアワーも適切に設定され、学生に周知されている。2021年度は学生モニター制度を活用し、コロナ禍の下での学修状況に関する調査を行った。定例教授会にて結果を共有し、調査結果に基づき今後の対応を検討したことは高く評価できる。

成績不振学生への対応については、成績不振の定義を明確化し、執行部が各学科主任へ成績不振学生の情報を提供し、対応方策の検討を教学改革委員会で行っている。実際の成績不振学生への対応は、各学科主任の主導により、学科ごとに行っている。また執行部および各学科では必要に応じて、学生相談室と連携をとりながら、成績不振学生への対応を行うこともある。精神的な病により闘病中であることが把握できている学生については別途、適切な対応を考える必要があるとの意見が各学科より出され、対応を引き続き検討することが確認された。

外国人留学生の修学支援は、入学時の個人・グループ面談を通じて行うほか、「基礎ゼミ」等および「ゼミナール」「演習」の担当教員によって行われている。また、来日できなかった外国人留学生に対しては、授業のオンライン・ハイフレックスでの授業配信を行い、対応している。ただし留学生の入学が増加傾向にある状況に鑑み、学部による組織的な支援体制の確立に向けて今後の検討が期待される。

学生の生活相談については、「基礎ゼミ」等、「ゼミナール」「演習」、卒業論文の各担当教員と学科主任が、学生の生活相談を受け付け、必要な助言を与えるほか、学内の関連部局と連携して課題の解決に当たっている。各学科では必要に応じて学科会議で課題の共有を図り、解決に向けて協力している。また、障がい、LGBTQIA などに関わる課題については、執行部も関与し、学内部局との調整を図り、対応を行っている。

7 教育研究等環境

(1) 点検・評価項目における現状

7.1 教育研究を支援する環境や条件を適切に整備し、教育研究活動の促進を図っているか。

7.1①ティーチング・アシスタント (TA)、リサーチ・アシスタント (RA)、技術スタッフ、授業支援アシスタント、ラーニングサポーター等を配置することによる、教員の教育研究活動を支援する体制は整備されていますか。2018年度7.1①に
対応

A：従来通り効果的に取り組むことができた
※教育研究支援体制の概要を記入。
<ul style="list-style-type: none"> ・実習系の科目においてTAを配置している。2021年度の実績は以下のとおりである。 日本文学科4科目4コマ、史学科4科目4コマ、地理学科22科目26コマ、心理学科8科目16コマ (TA20名) ・地理学科主催科目「現地研究」においては、現地研究補助員を6プログラム6名配置している。
【2021年度に改善された事項および新規取り組み事項等】※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。
特になし。
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。
・2021年度文学部TA人件費算出内訳資料

7.1②学部(学科)として、学生の学習環境や教員の教育研究環境の整備に関して、COVID-19への対応・対策を行っていますか。行っている場合は、その内容を教えてください。**新規**

※取り組みの概要を記入。
<p>【哲学科】</p> <p>哲学科共同研究室では、教員や職員同士の感染を防ぐため、アクリル板を設置し、換気を徹底した。</p> <p>【日本文学科】自宅にいても大学図書館のデータベースを検索して十分な学習環境を維持できるよう、1年次の基礎ゼミにて、VPN接続の方法と各種データベースの検索方法について簡単に説明した資料や動画を配付している。同資料は学科オリジナルHPにも掲載している。</p> <p>【史学科】</p> <p>ボアソナータワー15階史学科共同研究室2・3への空気清浄機とサーキュレーターを設置、消毒液の設置、アクリル</p>

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。
 ※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ
 ※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S:さらに改善することができた、A:従来通り効果的に取り組むことができた、B:改善することができなかった。」を意味する。

パーティションの設置、演習室扉を開放しての授業実施、共同研究室3へのハイフレックス授業用パソコンおよびタブレットの設置。

【地理学科】

- ・地理学科事務室へ入室する際、手指消毒を行い、事務室内は常時換気し、Google フォームで入室確認を送信している。
- ・実験室 (BT1200、1300) を使用する際、2方向の扉を開け、空気清浄機、大型サーキュレーターを使用している。
- ・測量機器など複数の学生が使用する機器は、その都度、TA が除菌ウェットティッシュで清拭している。
- ・「現地研究」を実施する際、2週間前からの健康記録表の提出、72時間以内のPCR検査等での陰性確認、参加当日の検温を行っている。また、宿泊を伴う場合は、個室を原則とし、大人数の会食を行わず、貸切バス等の定員にも配慮している。

【心理学科】

学科の事務助手(臨時職員)が常駐する心理学実習室では、二酸化炭素濃度を常時計測してモニタリングしている。換気のため、2箇所の扉のうち1つを常時開放し、2つのファンを常時運転させている。さらに、入口に非接触型の自動手指消毒器と非接触型の体温計を常備し、感染対策に万全を期している。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・日本文学科オリジナルHP (<http://nichibun.ws.hosei.ac.jp/wp/>)
- ・2021年度「現地研究」新型コロナウイルス感染症対策について

(2) 長所・特色

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、取り組み内容から「長所」や「特色」として特記すべき事項を記入。なお、現在「長所」や「特色」として特記すべき事項がなかった場合は、今後さらに「長所」や「特色」とする取り組み等を向上させていくために課題と考えられる点やその対応計画を記入していただく等できる限り記入をしてください。

内容
共同研究室や実験室など、教員・学生が複数利用する部屋を持つ学科では、ルールを決め、感染症対策を行っている。また、地理学科では「現地研究」を行うに当たって、厳重な対策を行った上で実習を実施している。

(3) 課題・問題点

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、改善を要すると判断される「課題・問題点」として特記すべき事項を記入。なお、「課題・問題点」に対する改善計画がある場合には、その具体的な計画(既に実施している場合にはその進捗状況も含めて)をあわせて記入してください。「課題・問題点」を認識し改善につなげるためにできる限り記入をしてください。

内容
特になし。

【教育研究等環境の評価】

文学部では、実習系の科目においてTAを配置している。また地理学科主催科目「現地研究」においては、現地研究補助員を6プログラム6名配置している。また現地研究補助員を配置している科目(地理学科主催科目「現地研究」)もあり、教育支援のための大学リソースが活用されている。

COVID-19へ学科としての対応については、共同研究室や実験室など、教員・学生が複数利用する部屋を持つ学科では、ルールを決め、感染症対策を行っている。地理学科では「現地研究」を行うに当たって、2週間前からの健康記録表の提出、72時間以内のPCR検査等での陰性確認、参加当日の検温を行うなど厳重な対策を行った上で実習を実施している。

各学科とも肌理細かな感染対策を行っている点は評価できる。

8 社会貢献・社会連携

(1) 点検・評価項目における現状

8.1 社会連携・社会貢献に関する方針に基づき、社会連携・社会貢献に関する取り組みを実施しているか。また教育研究成果等を適切に社会に還元しているか。

8.1①学外組織との連携協力による教育研究の推進に関する取り組み及び社会貢献活動を行っていますか。2018年度 8.1①に

対応

A: 従来通り効果的に取り組むことができた

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S: さらに改善することができた、A: 従来通り効果的に取り組むことができた、B: 改善することができなかった。」を意味する。

※取り組み概要を記入。

各学科で以下のような取り組みが行われている。

【日本文学科】

- ・学科教員の社会活動の概要……東京書籍（株）教科書編集委員、日本私立大学連盟教学担当理事者会議幹事（小秋元）、新沖縄文学賞・大阪女性文芸賞・農民文学賞・韓国文学翻訳コンクールの選考委員、文芸家協会常務理事、日本近代文学館評議員、K-Books 振興会代表理事、文化庁文化審議会著作権分科会委員（以上、中沢）、上野学園大学日本音楽史研究所特別研究員（ネルソン）、山梨県立文学館専門委員（中丸）
- ・学科教員による市民向け講座等の実施件数 2件（3名）
- ・その他……教員免許更新講習（小秋元・中丸）

【史学科】

- ・中国の龍門石窟、復旦大学文物與博物館学系、少林寺と学術協定を締結し、学生の国際性の涵養に努めている。
- ・学科教員による市民向け講座等の実施 2件

【地理学科】

- ・学科教員の社会活動の概要……愛知県長良川河口堰最適運用検討委員会委員（伊藤）、横須賀市環境審議会委員（山口）、八王子市環境審議会委員（山口）、流山市環境審議会委員（山口）、千代田区ヒートアイランド対策見直し検討会委員（山口）
- ・学科教員による市民向け講座等の実施件数 2件（2名）

【心理学科】

- ・学科教員の社会活動の概要……NPO いろえんぴつコミュニティズ顧問（高橋）、財団法人積善会曾我病院評議員（高橋）、文化審議会国語分科会臨時委員（福田）、徳島県教育委員会 発達障がい教育・自立促進アドバイザー（島宗）、EDS-NETWORK 委員会アドバイザー（島宗）、スポーツ庁「学校における子供の体力向上課題対策プロジェクト（テーマ1 体力低下種目の課題対策プログラムの開発等）」有識者委員（林）、日本パラリンピック委員会競技団体サポートスタッフ（荒井）
- ・学科教員による市民向け講座等の実施件数 8件
- ・その他……全国柔道整復学校協会主催の教員研修会講師（藤田）、仁愛大学FD・SD 学内研修会講師（藤田）

【2021年度に改善された事項および新規取り組み事項等】 ※自己評価でSを選択した場合に具体的な内容を記入。

特になし。

【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。

特になし。

(2) 長所・特色

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、取り組み内容から「長所」や「特色」として特記すべき事項を記入。なお、現在「長所」や「特色」として特記すべき事項がなかった場合は、今後さらに「長所」や「特色」とする取り組み等を向上させていくために課題と考えられる点やその対応計画を記入していただく等できる限り記入をしてください。

内容
特になし。

(3) 課題・問題点

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、改善を要すると判断される「課題・問題点」として特記すべき事項を記入。なお、「課題・問題点」に対する改善計画がある場合には、その具体的な計画（既に実施している場合にはその進捗状況も含めて）をあわせて記入してください。「課題・問題点」を認識し改善につなげるためにできる限り記入をしてください。

内容
特になし。

【社会貢献・社会連携の評価】

文学部の社会連携・社会貢献に関しては、6 学科のうち 4 学科の教員が多種多様な分野で活発な取り組みを行っており、特に複数回にわたる継続的な活動も見受けられ、評価できる。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。
 ※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ
 ※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S: さらに改善することができた、A: 従来通り効果的に取り組むことができた、B: 改善することができなかった。」を意味する。

9 大学運営・財務

(1) 点検・評価項目における現状

9.1 方針に基づき、学長をはじめとする所要の職を置き、教授会等の組織を設け、これらの権限等を明示しているか。また、それに基づいた適切な大学運営を行っているか。

9.1①教授会等の権限や責任を明確にした規程を整備し、規程に則った運営が行われていますか。2018年度9.1①に対応

はい
※概要を記入。
「法政大学文学部教授会規程」および「文学部教授会規程内規」にしたがって、学部長をはじめとする各職が設置され、権限が明確化された教授会以下、学部運営に必要な各種委員会が適切に運営されている。
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。
・「法政大学文学部教授会規程」「文学部教授会規程内規」

(2) 長所・特色

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、取り組み内容から「長所」や「特色」として特記すべき事項を記入。なお、現在「長所」や「特色」として特記すべき事項がなかった場合は、今後さらに「長所」や「特色」とする取り組み等を向上させていくために課題と考えられる点やその対応計画を記入していただく等できる限り記入をしてください。

内容
特になし。

(3) 課題・問題点

※上記点検・評価項目における現状を踏まえ、改善を要すると判断される「課題・問題点」として特記すべき事項を記入。なお、「課題・問題点」に対する改善計画がある場合には、その具体的な計画（既の実施している場合にはその進捗状況も含めて）をあわせて記入してください。「課題・問題点」を認識し改善につなげるためにできる限り記入をしてください。

内容
特になし。

【大学運営・財務の評価】

文学部では学部長と所要の役職（教授会主任、教授会副主任）が適切に置かれ、教授会や各種委員会組織も適切に設けられている。「法政大学文学部教授会規程」および「文学部教授会規程内規」にしたがって、学部長をはじめとする各職が設置され、権限が明確化された教授会以下、学部運営に必要な各種委員会が適切に運営されている。

III 2021年度 中期目標・年度目標達成報告書

No	評価基準	教育課程・学習成果【教育課程・教育内容に関すること】	
1	中期目標	体系的な専門科目と幅広い教養科目から成る現行のカリキュラムを維持・発展させる。特に、初年次教育を充実化し、多様な学生に対する円滑な大学教育への導入を図る。また、時代の変化に対応した科目設定の見直しを不断に行うとともに、より幅広い学びを可能とするカリキュラムのあり方についても検討する。	
	年度目標	各学科において、カリキュラム、教育内容（初年次教育を含む）について検証し、必要に応じて改編を行う。	
	達成指標	カリキュラム、教育内容（初年次教育を含む）を検証するための学科会議を開催する。	
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	S
		理由	カリキュラム、教育内容（初年次教育を含む）を検証するための会議を各学科が開催し、さらに執行部と各学科との間で個別に打ち合わせを行った。
改善策		—	
質保証委員会による点検・評価			
所見	各学科において、カリキュラム・教育内容を検証するための学科会議を開催し、執行部と		

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた、B：改善することができなかった。」を意味する。

			各学科との打ち合わせを行い、教授会において各学科での取組状況について報告があり、年度目標は達成されている。また、必要に応じて改編を行うための検討を始めた学科もあり、進展が見られた。
		改善のための提言	—
No	評価基準	教育課程・学習成果【教育方法に関すること】	
2	中期目標	学生の主体的な学びをさらに実現するための方策を積極的に導入する。特に、ゼミナール以外の科目におけるアクティブ・ラーニング、双方向型授業等のさらなる導入を図る。	
	年度目標	学生を対象に、アクティブ・ラーニングや双方向型授業の効果・要望を聴き取り、教員間で情報を共有する。	
	達成指標	教授会において情報共有の機会を設ける。	
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	A
		理由	学生モニターを実施し、1月の教授会において情報共有の機会を設けた。
		改善策	—
質保証委員会による点検・評価			
所見		学生モニターの結果、オンライン授業に対する学生と教員の受け止め方の違いが明らかとなり、教授会において情報共有され、年度目標は達成されている。	
改善のための提言	—		
No	評価基準	教育課程・学習成果【学習成果に関すること】	
3	中期目標	学習成果の多様で、効果的な測定方法の導入を検討する。特に、ゼミナール、卒業論文以外の科目における学習成果の測定方法について検討を深め、点検・評価活動へ活用する。	
	年度目標	初年次教育（「基礎ゼミ」等）を対象に、「学習成果の測定」に関する事例、課題について情報を共有する。	
	達成指標	教授会において情報共有の機会を設ける。	
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	A
		理由	教授会では情報共有の機会を設けられなかったが、学科単位で（例：史学科の特別学科会議・日本文学科のFDミーティング）、初年次教育授業の学習成果の測定方法や、成績評価基準等について検討と情報共有を行った。
		改善策	—
質保証委員会による点検・評価			
所見		学科によっては、初年次教育に関する学習成果の測定方法や成績評価基準等について検討がなされていたが、教授会において情報共有の機会が設けられておらず、年度目標は達成されていない。	
改善のための提言	教授会において、各学科での取り組みについて情報共有することが求められる。		
No	評価基準	学生の受け入れ	
4	中期目標	学部および各学科が定めるアドミッション・ポリシーを体現する現行の各種入試制度を維持するとともに、その発展をめざし、一般入試の出題形式、特別入試の試験形式等の見直しを図る。	
	年度目標	2021年度入試から導入する新たな留学生入試の制度設計、実施、効果の検証を行う。	
	達成指標	入試小委員会での新たな留学生入試の効果の検証の機会を設ける。	
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	S
理由	新たな留学生入試（小論文・面接型）に受験者が集中したため、面接型留学生入試の日本		

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた、B：改善することができなかった。」を意味する。

			留学試験の得点基準を変更した。	
		改善策	—	
		質保証委員会による点検・評価		
		所見	新たな留学生入試を実施後、速やかに入試小委員会で検証を行い、次年度に向けて変更を行うことは評価に値するが、変更に向けたプロセスやその内容が本報告書では不明瞭である。	
		改善のための提言	本報告書の記載において、内容面について踏み込んだ説明が求められる。	
No		評価基準	教員・教員組織	
5	年度末報告	中期目標	各学科の人事に関する内規に従い、専任教員の募集、採用、昇格を適切に行うとともに、年齢、国際性等において多様性をもった教員構成の実現をめざす。	
		年度目標	年齢、国際性等の観点で教員組織の現状を検証し、さらなる多様性の追求を図る。	
		達成指標	人事委員会において左記を検証し、各学科の新規採用人事に向けた情報を提供する。	
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価		
		自己評価	A	
		理由	教授会の専任教員採用人事を審議する場において、採用候補者について性別等の観点から活発な議論を行った。	
		改善策	—	
		質保証委員会による点検・評価		
年度末報告	所見	教授会の専任教員採用人事を審議する場において多様性の観点から議論したことは評価できるが、本報告書において、年度目標や達成指標に対応した記載がない。		
	改善のための提言	年度目標・達成指標の観点から記載することを望む。		
No		評価基準	学生支援	
6	年度末報告	中期目標	①成績不振学生、外国人留学生、体育会学生等への個別指導を丁寧に行う。	
		年度目標	①成績不振学生へ丁寧な個別指導を行うとともに、面談に応じない学生に対しても適切な対応を図り、学習を支援する。	
		達成指標	①春学期・秋学期とも個別指導を行い、結果を教学改革委員会で報告する。また、面談に応じない学生に対しては、郵便による個別通知を実施する。	
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価		
		自己評価	A	
		理由	春学期・秋学期ともにオンライン、あるいは対面で個別指導を行った。また、面談に応じない学生に対しては、郵便による個別通知も実施し、成果をあげた。以上の結果を第10回教学改革委員会で報告し、意見交換を行った。	
		改善策	—	
		質保証委員会による点検・評価		
年度末報告	所見	個別指導を実施した結果、個別指導されることをプレッシャーに感じる学生もいることがわかり、第10回教授会において情報共有されたことは評価に値する。		
	改善のための提言	—		
No		評価基準	学生支援	
7	年度末報告	中期目標	②学生のキャリア支援に関する施策を積極的に導入する。	
		年度目標	②教員が学生のキャリア形成に関わる活動の現状を理解し、年次ごとに適切な学生支援・対応が図れるようにする。	
		達成指標	②教授会において研修会を行う。	
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価		
	自己評価	S		

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。
 ※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ
 ※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S: さらに改善することができた、A: 従来通り効果的に取り組むことができた、B: 改善することができなかった。」を意味する。

	理由	2021年度第3回教授会において、キャリアセンターの講師による研修会「文学部生の就職活動とキャリアセンターの支援について」を行い、教員の意識を高めた。	
	改善策	—	
	質保証委員会による点検・評価		
	所見	2020年度は実施できなかった研修会を第3回教授会において開催し、文学部生の就職活動とキャリアセンターの支援状況について情報共有できたことは評価に値する。	
	改善のための提言	—	
No	評価基準	社会連携・社会貢献	
8	中期目標	社会人の学び直しの動向を受け、いま以上に社会人の学習の機会を提供するよう努める。	
	年度目標	社会人へ学習の機会を広げる方策として、転・編入試験における社会人入試制度等の導入の検討を継続する。	
	達成指標	入試小委員会、学科会議で検討の機会を設ける。	
	年度末報告	教授会執行部による点検・評価	
		自己評価	B
		理由	より広く三年次編入についての検討は行ったが、その中で特に社会人に限った議論には至らなかった。
		改善策	社会人入試の導入の可否を含めて、来年度検討を進める。
		質保証委員会による点検・評価	
所見		社会人入試制度等の導入の検討がなされておらず、目標は達成されていない。	
改善のための提言	社会人の学び直しについての検討は必要であり、入試小委員会や学科会議において検討が進むことを望む。		
<p>【重点目標】 教員が学生のキャリア形成に関わる活動の現状を理解し、年次ごとに適切な学生支援・対応が図れるようにする。</p> <p>【目標を達成するための施策等】 年次毎のキャリア形成に対する意識を高めることと、昨年度来のコロナ禍における就職状況を把握して適切な指導につなげることを目的として、教授会において研修会を実施する。</p> <p>【年度目標達成状況総括】 2021年度も昨年度と同様、新型コロナウイルス感染症の影響で教授会等がオンライン形式となるなど、議論や情報共有の場が大きく制約される中、キャリアセンターと連携しつつ研修会を実施できたのは評価できる。また、今年度は、専門科目と教養科目の両方を見据えたカリキュラム体系の構築を目指し、学部を挙げてカリキュラム改革の準備を進めているが、執行部の主導のもと、各学科においてもミーティング等で検討が進められ、学科ごとにカリキュラム改革の概要が決定したことは大きな成果といえる。他方、2021年度入試から新たな制度を導入した留学生入試（小論文・面接型）については、志願者が集中し、従来型の留学生入試（面接型）の受験者数が激減したため、入試小委員会で検討の上、面接型留学生入試の日本留学試験の得点基準を変更する等、次年度以降に向けた改善の取り組みができたことは有意義であったと評価できる。</p>			

【2021年度目標の達成状況に関する大学評価】

<p>文学部の2021年度の重点目標は、教員が学生のキャリア形成に関わる活動の現状を理解し、年次ごとに適切な学生支援・対応が図れるようにすること、およびそのための具体的な施策として、年次毎のキャリア形成に対する意識を高めること、昨年度来のコロナ禍における就職状況を把握して適切な指導につなげることを目的として、教授会において研修会を実施することであったが、概ね達成されていると評価できる。</p> <p>2021年度も昨年度と同様、新型コロナウイルス感染症の影響で教授会等がオンライン形式となるなど、議論や情報共有の場が大きく制約される中、重点目標の達成に向けてキャリアセンターと連携しつつ研修会を実施できたのは評価できる。</p> <p>また、2021度は、専門科目と教養科目の両方を見据えたカリキュラム体系の構築を目指し、学部を挙げてカリキュラム改革の準備を進めてきたが、執行部の主導のもと、各学科においてもミーティング等で検討が進められ、学科ごとにカリキュラム改革の概要が決定したことは大きな成果といえる。</p>
--

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。
 ※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ
 ※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S: さらに改善することができた、A: 従来通り効果的に取り組むことができた、B: 改善することができなかった。」を意味する。

2021年度入試から新たな制度を導入した留学生入試（小論文・面接型）については、新たな留学生入試を実施後、速やかに入試小委員会で検証を行い、次年度に向けて変更を行うことは評価に値する。他方で、今後社会人入試の導入の可否を含めて必要な検討や改革が実施されることを期待したい。

IV 2022年度中期目標・年度目標

No	評価基準	教育課程・学習成果【教育課程・教育内容に関すること】
1	中期目標	学位授与方針に基づき、各学科の専門分野の学問内容を積み上げてゆく専門科目と幅広い知識や教養を身につける教養科目とを融合・連携させた、現行の教育課程・教育内容をさらに発展させる。また、全学共通の新規科目の取り込み方を含め、設置科目の見直しを引き続き行う。
	年度目標	専門科目と教養科目との連携を深めること等を目指したカリキュラム改革を進める。
	達成指標	各学科でカリキュラム改革案を策定し、必要に応じて教授会で学則改定のための手続きを行う。
No	評価基準	教育課程・学習成果【教育方法に関すること】
2	中期目標	教育課程の編成・実施方針に掲げた課題の発見・解決やそれを表現する能力の涵養に資する教育方法を、各年次における演習科目等で継続するとともに、他の科目でも適用範囲をさらに広げてゆく。
	年度目標	対面・遠隔の同時混合（ハイフレックス）型授業において遠隔参加者にも双方向性を持った教育方法をとるための取り組みに関し、その有効性を検証する。
	達成指標	各学科会議で具体例とその効果をまとめ、それらについて教学改革委員会にて情報交換する。
No	評価基準	教育課程・学習成果【学習成果に関すること】
3	中期目標	演習以外の科目においても、双方向型の運営部分をさらに充実することにより、学生の学習成果についてより精緻に把握する。学期中の各段階における学習成果の測定をより細かく行い、それを学生へ適切に伝えられるようにする。
	年度目標	学生が提出する課題回答に対して教員が十分に対応できているか、学生アンケート等を参考にしつつ検証する。
	達成指標	各学科会議で聴取した意見を教学改革委員会で取りまとめ、教授会に報告する。
No	評価基準	学生の受け入れ
4	中期目標	学生の受け入れ方針として設定した能力・意欲等を入学した学生が有していたと言えるか否か、各種の入学試験経路別に分析を続けることにより、それぞれの試験のあり方を再検討してゆく。
	年度目標	指定校推薦入試の人数枠について、近年行われた変更の有効性を検証する。また、外国人留学生入試における二つの異なる型について、応募資格の比較検討を続ける。
	達成指標	指定校推薦入試や外国人留学生入試を含む各種入学試験の実施方法案について、応募者数の推移や入学後の成績を参考としながら入試小委員会において検討する。
No	評価基準	教員・教員組織
5	中期目標	各学科の人事に関する内規に従い、専任教員の募集、採用、昇格を適切に行うとともに、年齢、国際性等において多様性をもった教員構成の実現をめざす。
	年度目標	専任教員の新規採用に際しては、将来に予想される教員構成を勘案しつつ、適切に人選する。
	達成指標	人事委員会および教授会において、教員構成の現状分析と将来構想を加味しながら、専任教員の新規採用に関する審議を行う。
No	評価基準	学生支援
6	中期目標	①成績不振学生への個別指導を丁寧に行う。また、外国人留学生、体育会学生等への特性に応じた支援も行う。
	年度目標	①成績不振学生に対し、個々の事情に合わせた対応がとれるようにする。渡日できない留

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ

※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた、B：改善することができなかった。」を意味する。

		学生のための授業形態を整え、体育会学生への情報提供も行う。
	達成指標	①成績が繰り返し不振となる学生に関し、過去の面談結果を十分に考慮した個別指導のあり方を教授会において検討する。年度初めの体育会学生向けガイダンス等も続ける。
No	評価基準	学生支援
7	中期目標	②学生のキャリア支援に関する施策を積極的に導入する。
	年度目標	②キャリア支援に繋がる授業科目のさらなる充実を図る。
	達成指標	②共通科目委員会において、学部共通科目「文学部生のキャリア形成」の次年度外部講師に関し、海外を含む遠隔地在住者への依頼も検討する。
No	評価基準	社会連携・社会貢献
8	中期目標	学部の教育・研究を社会へ広報することで学部の社会における認知度を高めつつ、社会人の学び直し等の機会提供に努める。
	年度目標	学部創設百周年に合わせ、学部におけるこれまでの教育・研究活動について社会に向け広報に努める。
	達成指標	百周年記念事業として、公開企画を行うとともに、記念誌を発行する。
<p>【重点目標】 専門科目と教養科目との連携を深めること等を目指したカリキュラム改革を進める。</p> <p>【目標を達成するための施策等】 2021年度に各学科で議論を開始したカリキュラム改革案について、未確定部分の検討を進めるとともに、ILAC等との調整を行う。秋学期にはカリキュラム改革に伴って必要となる学則改定を学部長会議にて提案する。</p>		

【2022年度中期目標・年度目標に関する大学評価】

<p>文学部の中期・年度・重点目標はいずれも自学部の課題を的確に把握した結果であり、その対応策を真摯に企図している点において適切である。</p> <p>2022年度の重点目標は、専門科目と教養科目との連携を深めること等を目指したカリキュラム改革を進めること、およびその実現のための施策として、2021年度に各学科で議論を開始したカリキュラム改革案について、未確定部分の検討を進めるとともに、ILAC等との調整を行いながら、学則改定を提案することである。今後、このスケジュールにそって、カリキュラム改革が着実に実施されることを期待したい。</p>
--

【大学評価総評】

<p>文学部は、2021年度までの各評価基準に関する取り組みを2022年度もおおむね継続し、全体的な質的保証を損ねることなく、さらなる改善等も行っている点は、評価できる。</p> <p>同学部は全体の理念や方針に基づきながら6学科が自律性を保ち、堅固な教育体制を敷き、積極的な学部運営を行ってきたが、2021年度から専門科目と教養科目の両方を見据えたカリキュラム体系の構築を目指し、学部を挙げてカリキュラム改革の準備を進めてきた。今後スケジュールにそった改革が着実に実施されることを期待したい。</p> <p>教育課程は順次的・体系的に編成され、資質の高い教員体制のもとでバランスの取れた教育内容が提供されている。これから重要性が増す国際性の涵養や留学生の修学支援について、学科によっては斬新な試みが導入されているので、そうした動きが学部全体で組織的に展開されることが望ましい。また2021年度入試から新たな制度を導入した留学生入試（小論文・面接型）については、従来型の留学生入試（面接型）の受験者数の変動に対して、次年度以降に向けた改善の取り組みができたことは有意義であったと評価できる。</p> <p>COVID-19の影響下での教育方法や学習成果については依然課題はあるものの、引き続き感染対策を徹底しながら、良質な学習教育活動を継続するための取り組みを求めたい。</p>

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。
 ※注2 「はい・いいえ」は該当の回答を選ぶ
 ※注3 「S・A・B」は該当の回答を選ぶ ※注 「S・A・B」は前年度から「S：さらに改善することができた、A：従来通り効果的に取り組むことができた、B：改善することができなかった。」を意味する。